

第17号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十五年二月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

大西 亥一郎

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験が必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型(詩・柳歌・短歌・俳句・川柳)・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長 大西 亥



目次

ねこまんまの時代	大西亥一郎	1
なまくらにグツバイ	魅華	20
十一月の紅い花	明花	22
捨てられないメモ	高阪博一	26
「俳句」冬薔薇	彩華	29
嘘	令月	30
地球は青かった		40
或る夜の電話	高阪博一	43
詩三編	大西隆史	61
「Kの死」	胃弱亭骨人	65
門本君	小野村新一	68
ゴルフ道具	高阪博一	75
編集室から		77

ねこまんまの時代

大西亥一郎

ねこまんま

陽は中天にある。

星陵高校の長い坂道を下りる辺りから、腹が減っていた。

土曜日。英文法、グラマーの居残りをさせられていたから、いつもと違って友達はいない。垂水駅まで独り歩きながら、へたれた学生帽を持ち上げると、丸刈りの頭に晩秋の風が心地よかつた。

油引きの匂いが残る山陽電車に乗り込む。ガタガタと木枠の窓が震えては止まる。塩屋くらいまではよかつた。須磨、須磨寺辺りを過ぎると身体がだるくなってきた。板宿駅に着くと腹が鳴った。商店街と市場から漂う匂いを、つばとともに飲み込む。買い食いも喫茶店への出入りも高校生は禁止である。もちろんコンビニはまだない。

菅原道真公をお泊めた由来の板宿。その北東に自宅はある。滝川高校を覗みながら、緩やかな長い上り坂に向かつた。家まで更に十分ほどかかる。坂を登りだすと腹の鳴るのが止まって、身体が重くなる感じがした。つばを飲み込み、足を動かすが、次第に足が前に進まなくなった。冷たいものが背中を流れる感触がした。それは汗のようでもあり悪寒のようでもあつた。

ふえーつと細い息を吐いた。足が、ガクガクと震えるのが判つた。

坂の途中にあるどこかの家の階段に鞆を置くと、尻を降ろした。足を投げ出して上体をやや傾けると一息つけた。頭が、がくりと下がった。

「どうしたの？」頭の上から声が出た。

顔をあげると、母が目を見開いてのぞき込んでいた。白いエプロンに買い物かごを下けているから板宿市場に出かけるところなのだろう。

「腹減った……」情けない声が出た。

「えっ」母の声が跳ね上がり、それから小さな笑い声が混じった。「台所にご飯があるわ」

ご飯と聞いて、僕は鞆を挿んで立ち上がった。足に力が戻っていた。

玄関の鍵をぐるぐる回して開けると、ズック靴を乱暴に脱ぎ捨て、鞆をもったまま奥の台所に突進した。水屋からどんぶりと箸を出し、おひつを開けると、箸で冷やご飯をすくい上げた。一口押し込んで、嘔まずに飲み干した。腹の中にご飯の塊が落下していくのが判った。「はへっ」と大きな息をついた。

それからどんぶりにご飯を半分入れた。流しの下をのぞき込んで鰹節を引き出すと、ご飯に山盛りのにせた。ガラスの醤油差しを傾けてたつぷりとかけ、箸で混ぜた。喉が鳴ってつばが出た。が、まだである。どんぶりを左手で挿んだまま、箸を持った右手で蛇口を開けて、顔を近づけ直接水を飲んだ。一息つく。僕はおもむろにどんぶりの「ねこまんま」をすくい上げて頬張った。鼻腔に醤油の香りが広がり、舌の上で鰹節とご飯と醤油が三重奏を演じ始めた。

半世紀が過ぎた。平成二十四年。焼酎の湯割り片手に、酒のあては、この「まんま」である。

◆『ねこまんまの時代』

『ねこまんま』は高校時代の思い出である。文中にもあるが、1964年（昭和39年）前後当時、兵庫県立星陵高等学校に通っていた。高校2年生の時に「東京オリンピック」が開催された。東海道「新幹線」が初めて東京大阪間に開通した年でもあった。

因みに何本か最近（2012年）までに作られてヒットした映画『三丁目の夕日』には東京タワーが出てくるが、1958年（昭和33年）に完成している。

私が神戸市立飛松中学校三年生の時の修学旅行には、3年17組で東京へ修学旅行に出かけている。確か東京タワーにのぼった。

「え、3年17組」とクラス数の多さに驚かれる方もいると思うが、ひとクラス55人学級で、学年2

2クラスあった。まだ高度成長が始まる直前で、しかも戦後、中学が義務教育になり、しかも私も私は戦後のベビーブーム、昭和22年生まれの子の塊の世代のトップグループである。

中学は足りなくて、すし詰めだった。

だから住居は変わっていないのに、私と3歳下の弟とは、小学校の途中から学校が違い、中学校も違う。弟はドンドン建てられた新しく出来た処に入ったのである

その青春時代の始まりは「日本の奇跡」と言われた高度成長期と一致している。

さて、『ねこまんま』である。丸坊主に学生帽、制服、ズック靴が1964年（昭和39年）当時の高校生である。

スニーカーという呼称はなくて、種類も少なく、上履きみたいに薄い生地の靴であった。靴底も薄くて、まあ地下足袋の親戚みたいなものだろうか。

育英高校と滝川高校の間に自宅があつて幼年から成人するまで過ごしている。近くには現在の須磨学園の前身である須磨女子高校があつた。北へのぼると、育英高校、高取山へと続く。

自宅から山陽電鉄の板宿駅まで坂道を下り、母校の板宿小学校前を通り、商店街をてくてく歩く。板宿東宝とか後にパチンコ屋になる銀映という映画館があり、チラチラ看板を横目で眺めつつ歩いた、12分くらいだろうか。

菅原道真公が太宰府に流されるときに、板で仮の宿を作つたという地名の板宿駅は、現在は地下一駅だが、当時は地上駅である。

この板宿、私が成人して東京の知人が来たとき「ばんじゅく」と読んで下された。ま、「しんじゅく」に「はらじゅく」の東京から来れば「いたやど」とは読めるはずもない。

踏切には記憶は定かでないが、踏切番のおじさんが小屋の中において、遮断機を上げ下げする。もう

自動になつていたかも知れない。

ガタゴトと電車が来る。本当にガタゴトとやってくる。

なにせ、電車は板張りの床で、時々、油引きする。板は合板はない。時にささくれだつ木材そのものだ。この時代鉄筋の小学校校舎でも床は板張り、油引きする。防水と腐食を防ぐためだろうか。薄い茶色の油はぬめぬめとして、鼻をつく臭いがする。

電車の窓はもちろんいうまでもなく木枠である。だからガラス窓はガタガタと揺れる。隙間風が入ってくる。

要は石油から作られる化学製品、プラスチックやビニールは種類も量も極めて貧弱であつたわけだ。技術も低い。

例えばタツパウエアというプラスチック製の容器がある。これはアメリカのタツパーウエア社の登録



商標だが、商品の代名詞にもなっている。何故か、当時の日本製は、いま100均で売っている中国製より品質が悪かったようだ。蓋がピタリと閉まらない。あの柔らかい蓋には独特の製造技術があったのであろう。もちろんアルミや鋼板も同様である。高価でもあったのだらう。後になるがクラリーノという合成皮革の靴が出来たが「なに！ 革靴より高い？」と目を剥いた覚えがある。

この山陽電車で板宿から須磨を経て垂水に向かう。半時間以上はかかった気がする。

正確でないのはお許し願いたい。なにせ半世紀前である。勿論この文に記載の年号などではできる限り調べて、正確を期している。

垂水まで来ると「遠くへ来たなあ」と思う。2012年の今は明石駅の更に西に住んでいるが、当時は垂水の向こうの明石市は異境であった。

子どもの地理的空間は小さい。交通手段や情報がないと大人になっても生涯空間は大したことはない。江戸時代の摂津・播磨の住人は一生に一度お伊勢参りが出来れば、大旅行であったであろう。

私が高校生であった半世紀前、1960年代。東京へさえ大旅行であった。飛行機に乗った経験のある人は私の周りにはいなかったし、まして「洋行」といつて欧米に旅する人は珍しかった。私は新幹線の出来る前の中学校の修学旅行で東京に向かった。神戸から東京まで「希望号」という修学旅行専用電車で7時間以上かかる。

食糧管理制度が残っていて、コメは各自持参。東京では東京タワーと国会議事堂と、皇居、それに羽田空港を見学した。大阪空港はあつたがジェット機が飛んでいなかった。

成田空港や、関西空港？ 神戸空港？ それはまだ田畑や海である。

でまあ、明石市が遠いという話からまさに遠く  
なつた。

板宿から垂水駅に着く。当時はまだ高架ではな  
い。ここから北へ2キロくらいところに兵庫県立星  
陵高校があつた。今でも道路を「商大筋」というが、  
高校に隣接して神戸商科大学が建つていた。周辺  
は禿げた地表が延々と広がっている。

元々丘陵地である。「星陵」、星ヶ丘である。そこ  
の開発が始まつていて、ブルドーザーがそこかしこ  
で唸つていた。

直線で駅から高校まで約2キロだが極めて緩や  
とはいえ上り坂で、高校の手前から急な坂道にな  
つた。

駅から「山陽バス」が走つていた。

これに、乗らなかつた。

「まあ、2キロくらい」と、思わぬでもないが、炎天下

や寒風の時は辛い。

実は、乗れなかつたが正しい。高校生はバス禁止  
である。

「山陽バス」がよくまあ営業妨害だと言わなかつ  
たものだと思う。若者は歩く、バス禁止に誰も異論  
は称えなかつた。

丸坊主、帽子着用、バス禁止、喫茶店に入つては  
いけない、買い食い禁止……。ニギビ面に効く「ク  
レアラシル」も「びふナイト」も売つていなかった。

買い食い禁止は商店で売つてくれなかつた。買う  
と変な目で見られた……。らしい……。

私は極めて真面目で品行方正であつた。つまり  
びびりで小心者で、神経質に約束を守る。買いたい  
し冒険したいのに我慢して……。いいえ、見つかったら  
怖いから……。

尤も自販機もコンビニもない。携帯は40年先に  
登場する。iPodもその先駆けのウォークマンも  
なかつた。CDもMDもなく、カセットテープもなか

った。LPレコードだけあった。

寒い冬も炎天下も、高校生は歩いた。

歩き出すと時間が判らない。なにせ腕に時計がない。

高校の修学旅行に行くときに初めて父親に、腕時計を買って貰った。

そう、もちろん電池式も、自動巻もない。さらにもちろんGショックもないし、ソーラーや電波式を持つていたらそれはたぶん時間旅行者か宇宙人であつたであろう。

はるかにものの値段が安い、給料も安い。ちよいと調べてみる。

昭和40年の公務員初任給は21600円、日雇労賃は972円で週刊誌は50円だった。

また現在のように千円(当時になおすと100円か)時計なぞ売つてはいなかった。

しかし嬉しかった。

その後十数年使い続けることになる。勿論防水なんぞという機能はない。古くなると文字盤の透明のふたが時々外れた。20代後半くらいの時か、ついに文字盤の文字にカビが生えた。

「兄ちゃんこれやるよ。それあんまりやで」

と、生活が安定して稼ぎのあつた弟が、新しい時計を買うからと自分のしていた時計をくれた。シチズンエクシードという。いまも時々愛用している。

この記事を書くのでシチズンに問い合わせる。とすぐに返事が来た。

製品名 エクシード EXR1300

発売日 1984年代

当時の価格 63000円

当時の価格だから、これは随分高い時計を、古くなつて買い換えとは言えプレゼントしてくれたものである。ところが考えてみると私の20代後半は

1970年代前半だから、時代があわない。多分、私が結婚して、ことも二人を抱えてひいこらしていたときに、弟がくれたのだ。

時計は間違いだが、この20代後半時代、父の失業など事情があり、私はまだ大学生であった。それも奨学金と、家庭教師と製氷会社のアルバイトで極貧生活中である。

4畳半一間で、共同トイレというアパートの部屋には、冷蔵庫も洗濯機もなかった。もうカラーテレビの時代であつたと思うが、テレビもなかった。家庭教師先の奥様が「先生、テレビがあつた方が良いでしょう。これ使わないから」と、ミカン箱程のアンテナの付いた白黒テレビを貸してくださつた。

小さな流しで、下着からカッターまで手で洗つていた。洗い終わると上から力任せに絞り上げて、隣家の屋根の上が見える窓から干した。冬は流しの上に針金ハンガーで干したが、ぼたぼたと流しを

叩く音が布団の中まで染みこんでいた。ま、そのことはいずれ書く機会があるかも知れない。

またまた時代が元に戻つて星陵高校のグラウンドと校舎の間には、大きなブリキの波板で出来たかまぼこ形の宿舎があつた。クラブの部室に使われていた。それは進駐軍の宿舎跡である。

第二次大戦で日本が負けて、アメリカ軍を主体とする占領軍が日本にやつてきた。それを進駐軍とも言う。その兵舎が彼らが去つた後も高校に残つていた。

高校の校舎は次の写真である。

「華やかやなあ：」なにせ約半世紀前の卒業アルバムからコピーしたのでお許し願いたい。このアルバムの最初、見開きの写真の半分のコピーであつて、ここだけがカラーだ。写っている車も当たり前ながらクラシックカーだ。外からは判らないが、壁が厚い。戦前の建物であろう。これは私が通つていた板



宿小學校も、やたらと壁が厚かった。

現在、この星陵高校は取り壊されて新校舎になっている。一度だけ妻と無断侵入したが、しゃれた小さな短大という雰囲気になっていた。板宿小學校は今も外見はそのままでのような気がする。

この高校で、私は「ナナナなんと演劇部」に属していた。当時神戸市に「道化座」というプロ劇団があり、衣装を借り、ドーランを塗って文化祭で舞台

に立ったのを覚えている。

「失敗したなあ」「痛かったなあ」という思い出が2

つある。



一つは上の写真（セントラルサーピスのHPより・白黒に変換）のように、舞台に家の内部を作ったときに出入り口をつくる。この写真などプロ仕様で立派なものが、高校などでは木枠だけで形だけの出入り口である。しかも舞台の奥に作ったので前方が大きく空いていた。

「そうなのだ……」

入ったときは良かったのだが、出るときに出入り口から出ずに、前を素通りしてしまった。

見ていた生徒達は「なんか変だな」と思ったらしいがすぐには理解できずにいた。

「ワハ……」

「ワハハ……」

「ウワツハツハハハ」

と次第にこの理由が判明し、笑いは伝播して講堂全体に広がった。

勿論、私は「はつ」と気がついたが後の祭り。真っ青になった、ようだ。しばらく語り草になった、と書きたいところだが、私にとつて辛いなことに劇はその後も続き、単純ミスは忘れ去られた。

がまあ、心優しい星陵高校の同級生達は、判つていて責めなかったのだつた。

ありがとうございます。うん……、ぐすん。

もう一つは本当に痛かった。実は、当時私の母が

ある新興宗教に入り、私も訳も分からず引き込まれていた。

或る日、クラブの上級生の女の子にその話をバスの中でした。多分どこかに衣装か何かを借りに行つた帰りだつたと思う。

明くる日の放課後、彼女のボーイフレンドとか言う男性に、空き教室に呼び出されて、お腹をぶん殴られた。息が出来ない程痛かつた。

ボーイフレンドも上級生である。中学・高校・大学時代の上級生には原則逆らえない。

「余分なことを言うな」

と、吊り上がった目は迫力があつた。

別に口説いたわけではないから、彼女にしてみれば、軽い気で話したのかも知れない。また「自分もっているように」話したのかも知れない。

「え、私が嫌な男だつた……、今でいうセクハラだつたのではないか……」

うむ……、宗教の話だよ。そうは思いたくないが、

正解かも知れない。哀れな話である。

でまあ、本業の勉強はしなかった。B評価が多かった。英語のグラマーは赤点で、夏休みに補習に通った。

アルバムには、後ろに数枚の写真が貼ってあった。下の写真は、星陵高校の文化祭の仮装である。最上段、左から3番目、大きな麦わら帽子が私だ。左隣の木の枝の影になっているのは、昨年あつて飲んだ田中君である。ま、読者にはどうでもいいか。

真ん中に「抵抗」とプラカードがあり、右下の「3.4」は3年4組であろう。

その「3.4」の上に「ベトコン」とある。

若い方はご存じないだろうけれども、ベトナム戦争があった。宣戦布告なき戦いで、米ソの冷たい戦争の代理戦争であった。

「米ソつてなに……？」と訊かれそうだ。



アメリカ（資本主義国）とソビエト連邦（現在のロシアを中心とする共産主義国家）がにらみ合っていた。ベトナムは国家が二つに分断されて、戦っていた。

因みに、朝鮮は今も分断されたままである。ドイツもそうだったが1990年に統一を成し遂げた。

ベトナム戦争は1960年開始というのが一般的で、1975年のサイゴン陥落によってベトナム戦争は終戦した。

この戦争では、第二次大戦の日本人戦死者の何倍かの人が亡くなっている。凄まじい戦いである。

北ベトナムの抵抗勢力が「ベトコン」である。南ベトナムはアメリカを中心に韓国軍等も加わり、近代兵器を駆使したが結局敗れた。アメリカやヨーロッパで反戦運動が高まり、日本の若者もこういうことをしたわけである。ベトナムのことはなんとなく知っていたが、知識は貧弱である。若者の気負いだ

けである。日本国内は高度成長に沸いていた。他国で人が死に、それで儲かる国もある。難しいこともいろいろあるが「戦争」を「死の商人」の道具にしてはならないと思う。



どうも説教臭くなりそうである。

このアルバムの写真には修学旅行の時のものも貼ってあった。

半世紀前の私である。後ろは阿蘇山の火口。

なかなか格好いいと本人は思ったので、残してあるのだろう。

「コートに手を突っ込んで、かっこつけて……」



と、にやりとしつつ眺めている。

写真というのは面白いです、確かに本人なのだがその刹那を切り取ったものにしか過ぎない。

変に写ったり、吹き出しそうな表情をしていたりいろいろなところがある。どれもこれも本人の一場面、一瞬間であるのだが、「見せたくない」シーンもある。

白黒だが、当時はカラーは、はてさてあったのだろうか。卒業アルバムの校舎のページだけがカラーなのだが、どうもだいぶ手が入っているようである。なんとなく色の感じがおかしい。

一般ではカラーなんぞ、あまりお目にかからなかった時代かも知れない。

フィルム時代だが、写真機自体、個人で持っている人は限られていた。貴重品だ。中学時代の卒業旅行の写真は個人的には皆無だ。

そういえば、幼少期の写真も数える程しかない。家の近くで遊んでいると、写真機を持った中年

女性が近づいてきてパチリとやる。出来あがったら売りに来ていたようだ。そんな商売が成り立っていた。

伊藤・田中・野村・久保・櫻井といった面々がスナップに残っている。亡くなっているものもあるかも知れない。或いは、私と同じ老残の境遇かも知れないし、バリバリ活躍されているかも知れない。

この「ねこまんま」時代だが、あまり快適な記憶は少ない。家庭環境が影響していたのだと思う。

父親は当時の住友銀行に勤めていたエリートだが、学歴や仕事のこと、もの凄いストレスを抱えていた。

大正12年生まれで私立の商業高校の出身だ。そろばんが頭の中で置ける程上手くて、当時の銀行には必要不可欠の人材だったらしい。パソコンも、

電卓も何もない時代だから、お金を扱う銀行は札を数える技量とそろばんは大事であった。

人間関係は、私の性格や行動からも類推すると、どうも不器用であった気がする。

私自身が、くそが付いているのはお許し願いたいが「くそまじめ」「神経質」「小心」そのくせ自尊心が高く「傲慢」でもある。権力志向なくせに、反権力的なのは父親の行動に「恐れと反感」を抱いて育ったからであろう。自分が善く思われたい、目立ちたい、でも自信がない。

しかし善く思われたいというのは、良いことで、善く思われたいから他人にも善くする。ま、「してやるからしてほしい」と期待すると言うことである。

おかげで、友人知人は現在も多くいて、随分と助けていただいている。が父親にはあまり友人はいなかつたようだ。というより、「父の友人を一人でも挙げてみる」と言われても顔も名前も出てこない。

今から考えると孤独な人だった。住友銀行も戦

後になると優秀な大学出がドンドン出てきていて、焦りもあつたのかも知れない。

毎晩午前様であつた。仕事上のつきあいのようで、とにかくペロンペロンである。

目が据わっている。

「味噌汁！」

と母親に言う。

夜中の十二時過ぎに突然言われても、ないことも多い。

丸いちゃぶ台をひっくり返す。

俺は働いているのになんだ、というわけで、母親を殴る。時には包丁を持ちだし、母親は裸足で家の外へ飛び出す。

私と弟は殴られたことはあるが、それほど酷くという覚えはない。専ら母親が殴られていた。今なら確実にDVで離婚であろう。

実際、母親は私たちが小学校時代に離婚を考えたこともあるようで、なんだか騒がしかったのを

うつつらと覚えている。

結局、母親は我慢して私たちを育てた。時代から言つて女性の働く職場も少なく、政府は子育てを女性に押しつける「専業主婦」政策を採つていた。

私は父親にかまつて貰つた覚えは殆どない。

この父親の毎晩の暴力、子どもにストレスを与えないはずはない。

私の爪噛みは小学生時代から、成人しても続いた。一番酷い青年前期ころは、爪だけでなく十本の指先の皮膚を食いちぎり、血が滲み出てもかみ続けていた。

それでも非行に走らず、なんとか見かけが正常に育つたのは、専ら母親の愛情があつたからだろう。

今から考えると、父親も一人息子で大切に育てられ、銀行というある意味、重い世界で苦勞していたのだろうと思う。

結局、父親は私が19歳の時に銀行を免職の様

な形になる。手形の裏書きをして、それが不渡りになつたようだ。

両親の立場にたつと、子育ての最後、大学に進ませて社会に出すという直前で、資産も貯金も総て失い、路頭に迷うという状況である。

私の高校時代は、多分父親が、融資実績を上げることを迫られた時期だったのであろう。融資先とのトラブルに巻き込まれて、毎日が地獄のような勤務。

それが反映して、家庭での暴力。しかし息子達は大きくなり、母親に手を上げる父親の前に立ちふさがるようにはなつていた。

高校時代に何をしていたかという点、もちろん勉強である、と書きたいところだが、それはただ授業に出て追いまくられていただけであつた。

マンガはよく読んでいた。

「少年マガジン」という講談社の週刊少年漫画雑誌は1959年（昭和34年）創刊である。

私が中学校1年生の時に発行された気がする。それまでは月刊の学年雑誌のようなモノしかなかった少年雑誌の世界に新種が現れた。小学館の「少年サンデー」も相前後したが、40円と30円の価格差はすぐに両方とも30円になったらしい。集英社の「少年ジャンプ」は1968年（昭和43年）である。

これらは後に発行部数が100万部というようなお化け雑誌になる。

私たち団塊の世代を最初にして、後の青少年に大きな影響を与え、今のアニメの基本を育てたのではないかと思う。

私の場合、多分30歳代までは読んでいた気がする。

鳥山明のドラゴンボールなどは、生まれた子ども

もと一緒にテレビを見ていた気がするから、40代も影響が続いていたようである。

「ドラゴンクエストもしていたか……」

その後のテレビゲームにもはまっていたから、これはもう死ぬまで続きそうだが、ルーツはこの中高生時代にある。

手塚治虫が好きで、手塚治虫全集400冊も購入した。これは息子達も愛読して、今でも内容は兎も角、「読んだな」としつかりと覚えていてから、視覚に訴えるマンガというのは、文学よりインパクトがあるのかも知れない。

「勉強しないでマンガ漬けとはなさないなあ」と考えぬでもないが、あの時代の特色として、本もまた結構読んでいた記憶がある。

テレビは魅力的だったが、パソコンもインターネットも、カセットテープもなく、時間はたつぷりと

あつた。

星陵の同級生でHというのがいた。なんとなくよくつるんでいた。

このHの部屋に遊びに行つて愕然とした。

「うわーっ！ 負けた！」

と内心で叫び声を上げた。

部屋の壁一面につり棚が設けられていて、そこに「岩波新書」がずらりと並べられていた。

啓蒙書という形で1938年（昭和13年）に刊行されているから日本最古の新書である。

中公新書は1962年、講談社現代新書は1964年創刊だから、私の高校生時代はまず岩波が中心である。

彼は民主青年同盟、正式には日本が付くらしいが、日本共産党の青年組織に入っていた。左翼である。

左翼・インテリ・学生と言うイメージがあり、実

際彼は思想的なことをよく知っていた。

政治や経済、宇宙の成り立ちから天下国家まで、悪く言えば「青臭い」知識の塊である。

私は慌てて、彼の真似をした。民青（民主青年同盟）や共産党には入らなかつたが、岩波新書を貪るように読んだ。

ま、今では、すっかり忘れたが……。

さて、青年期の恋はどうかというと、「ときめき」と性への興味は人一倍あつたと思う。

1960年代では、ヌードさえ「危険思想」の時代である。性情報は、耳学問と僅かなエロ雑誌、それも現代から見るととてもエロとは言えないようなものから得ていた。

どういうわけか、自宅の両親の本箱に「チャタレイ夫人の恋人」があり、両親が留守になると密かに読み、青年期の欲望を満たしていた。といつてこれ

も発禁だ何だと騒いだ割には、今では発行されている週刊誌の三流小説程も酷くない。

心ときめく同級生もいたが、会話してドキドキするくらいで、デートまでは申し込む勇気がなかった。

斯様なていたらくの星陵高校時代である。

案の定、卒業時に勇んで受けた立命館大学文学部日本文学科は不合格である。この学部学科名は違っているかも知れない。国文学ではなかった気がするが……。しかしまあ、よく勉強する女子高生が沢山受ける学科を、ろくに勉強もしないで受けたものである。

大体、妙なことに中学時代から数学が好きで、高校でも物理などは好成績だった。それが文学に

変わったのは、この高校生時代に母親がNHKの昼のプレゼントなどの台本家になったからかもしれない。

NHKの漫才の台本コンクールに入選して、「お浜こ浜」とか「いとしい」とかの台本を書き出した。そしてテレビの脚本も書き出していたので、その影響なのだろうとも考える。

この母の輝いていた時代は、父の失業で幕を閉じることになった。

私の青春遍歴は、この父の失業と「明日食べる米がない」時代に入るが、それはまたの機会に。



### 神戸エルマール文学賞

◆HPや通信でもお知らせしましたが、「神戸エルマール文学賞」の基金委員会総会と「第6回授賞式」に参加してきました。

「神戸新聞文芸」への応募や「神戸市市民文芸」「明石市文芸祭」等への応募は以前にもご案内しました。アクトス15号には詳しく説明しています。お手元にありませんでしたら15号をご覧ください。

居住されている各地方自治体でも、いろいろな団体や公的機関が文芸作品の募集をされていると思います。勿論、マスコミや出版社、企業の募集もあります。

アクトスの会員の中には、神戸新聞などの読者の投稿欄、或いは神戸新聞文芸などで、入選・受賞、活躍されている方もあります。学生短歌コンクールで「前田純孝賞」を取られた方もおられます。

どんどん応募して、腕を磨いて下さい。沢山の中でもまれ、いろいろな選者の批評を仰ぐことはとても参考になります。幸い、営利を目的としない同人誌に掲載された作品は「応募可」という募集が多くなっています。また「不可」の場合でも、掲載作品を核にして換骨奪胎し、新しいものを書き上げることは出来ます。とにかく書いて、書きためていただく。

この「神戸エルマール文学賞」は、関西の同人誌掲載作品が対象です。個人の自費出版物でも良いようです。アクトスは同人誌として参加しています。アクトスに発表されれば、それが選者に読まれることになりました。是非、いいものを書いていただきたいと思えます。ご注意ください。小説・文芸評論・エッセイ等の**散文作品**であることです。詩や短歌、俳句などの短詩形は対象外です。短詩形は掲載しやすく、発表しやすいので同人団体もたくさんあり、応募先も多くなるようです。そちらでも頑張ってみて下さい。

アクトスの散文の場合、私自身のものも含めて作品が少し短すぎるのと、独特の視点がない気がしています。しかし、読み、書けば書く程、良くなります。どの時点かで一段階ずつと書く力が伸びるようです。

生涯書き続ける趣味を持つことは素晴らしいことです。発表し、同好の人たちと交われば、社会性も出来ますし、時に合評会や、飲み会に来ていただければ更に…、とも思います。

どこにいつてもストレスや人間関係はありますが、アクトスは「和」で行きたいと思っています。是非ドンドン書かれて、ご参加下さい。

なまくらにグツ・バイ

魅華

今年も残すところ十日。大切に時間を使いたい、そういうことはよく思う。

今日一日を大切になどと……。しかし現実には、なかなかそうはいかない。

次女も嫁いで、主人と二人暮らしになると気楽、故に主人を朝見送つてから再び、ぬくもりのあるお布団に直行の時もある。あーあ今日もまた、少しへこみながら二度寝から起きて家事を始める。それを終えると、日課にしている五十個のストレッチと筋力トレーニングをする。これには訳があつて私には必須なのだ。体脂肪が去年と比べると、驚くほど増えてしまった。それを理想型に戻したいと話したら、写真付エクササイズをくれた。すべて

する必要はないのだが、何とか減らしたいと頑張っている。

私の家から歩いて、十五分くらいの所にふれあいプラザあかし西がある。その1階に体組成計があり無料で計ってくれる。継続して、みてくれて、気がかりなことがあると相談にもものつてくれる。

私はどちらかというと痩せ体質だから体重も落ちやすく、体脂肪も低いと安心しきつていた。しかし年齢的なものと、日頃の生活が前より動かないことが多くなつたせいで、ドンと体脂肪が増えてしまったらしい。そういえば、気持ちのいい季節になるとウォーキングを始めるが長続きしたことがない。今年の春は「よし、続けよう！」と意気込み、主人を見送つてから万歩計をつけて歩き始めた。少しずつ距離をのばし、歩かねばの思いで。根がずばらなので、このくらいはしないと、思つてしまう。結果長続きしない。



季節が変わって夏の暑さが和らいだ頃、歩こうと思つて再び歩き始めた。「あーあいい気持ち」歩く気持ちよさも分かつたので、続きそうと思いきや、雨が降ると休む、そうすると怠け心が顔をだし、てくる。というわけで中途半端で終わつてしまふ。

私と対照的なのが主人。三年前に前立腺がんと告知されてから、なおいつそう歩くことに重きをおいている。免疫力が上がるということもあつて、三連休二日目、三日目にはトータルで二万歩は優に超え、三万歩近く歩いたと言つて周りを驚かせたこともあつた。仕事で疲れ過ぎてなければ、日曜の朝早くリュックを背負つて歩いている。主人と私の違うところは、ウォーキングを趣味にしているか、家でのらくらしてたらあかんから歩こうかの違いである。方や趣味、私は義務感。

そういえばアクトスの会員さんに、毎日歩くことを何年も続けていらつしやる人がいる。四季折々の

花を見ながら。そういうのがいいなと思う。車に乗つてると見落としてしまふことも、歩いていると思わぬ発見があつたりもする。

一つこいらで、楽しみながら歩いてみようかなと考えた。最初は歩数は気にせず疲れたら帰つてくる。それか、喫茶店でお茶を飲む。お昼を食べるお店を決めてそこまで頑張る。海を見ながら歩く。発想を変えるのできそうな気がしてきた。

その前に冬は引きこもりがちになりやすいので、思い切つて外にしよう。何とあまい、怠けものの発想なんだろう。主人は朝早くから働いてくれているというのに。

気合だ！気合だ！どこからともなく、そんな声が聞こえてきそうな気がした。

十一月の紅い花

明花

十一月の空は灰色だ。

晩秋から冬にかけての季節がどこかさみしげなのか、冬の十二月の方がクリスマスイルミネーションがあるからなのか華やかな空気が含まれている。

中学三年生の十一月、私の気分が灰色だったのかもしれない。同級生たちといつも笑っていたような記憶しかないのだが「進学」「受験生」という言葉がどこかでいつも引つかかっていたのかもしれない。「コツコツ」廊下から足音が聞こえて来た。担任の先生だ。いつものように白衣と折れたテニスラケットに出席簿を持って、ガラリと三年三組の前のドアを開けた。

「おはよう」

そして小脇に抱えた花を「とん」と教卓に置いた。白っぽい朝の空気が一瞬でぼつと紅く染まつたよう

な、体温が上がるような真紅の花だった。エキゾチックな感じがしたが、初めて見た花だった。白衣と白っぽい教室、十一月下旬の冷たい空気と鈍より曇った空を、一瞬で払拭した。

「なんて、名前の花なんだろう」私はその紅い花から目が離せなかった。

いつものように朝の挨拶に始まり、出席をとつて、何か連絡事項が伝えられたのだろうが、私は「あの花は何？」と、そればかりが気になつて仕方なかった。

そんなに気になるのなら、朝礼の後「せんせ、その花なんて名前？」と聞きに行けば良かったのに行かなかつた。思春期の中学生は取り扱いがむづかしいのだ。

結局、直接先生に聞くこともなく「週記」に書いて先生に提出した。

「先生、あの花の名前は？」

「週記」というのは先生とクラス四十五人の個人それぞれの交換日記で、流石に全生徒に毎日だと先

生も疲れるので一週間に一回提出することになっていた。だから「交換日記」ならぬ「一週間に一回の週記」なのだ。

例えば学習の記録のために○月○日 数学ドリル何ページとか書いていたような気がするし、今日見たテレビ番組のことなど取り止めもない事を書いていたような記憶がある。その当時は交換日記が流行っていて、早熟な子は男子女子で、私は女子五人組みで中学一年の後半から三年生の中頃までグルグルノートを回していた。

先生との「週記」は結局、書く事が好きな何人かの女子が提出し続けていた。

私の担任は、ずいぶん個性的な先生だった。三十歳半ば、数学教師でテニス部顧問。夏場は白の短パンに半袖の白いポロシャツ。冬場は元々理科の教師だったこともあり白衣を羽織り、巨人が勝てば上機嫌。当時「白雪姫」と呼ばれていた天地真理

の大ファンで真里ちゃんの話で盛り上がっていた。そして特筆すべきは、今や見ることもなくなってしまうたガリ版で毎日、学級通信を発行していたことだ。私の手元には三十七年の風雪を乗り越えすっかり茶色になった一学期、二学期そして卒業の記念の冊子の四冊がある。

何日かして先生から「週記」が戻ってきた。

先生からは「ポインセチアよ」と一筆。

あー、ポインセチアって名前なのか。

今はクリスマスを飾る花に相応しく、十一月の下旬には花屋やスーパーでも鉢花として見かけるし、今や紅色の他ベージュ系の白い花やピンク色まであり、何色を買おうか迷う。でも結局紅い鉢を選び、つつい微笑みながらつぶやいてしまう。

「ポインセチア、よ」。





## F O P

しんこうせいこつかせいせんい いけいせいしよ  
進行性骨化性線維異形成症 (Fibrodysplasia Ossificans Progressiva : FOP)とは結合組織に発生する稀な遺伝子疾患。発症率は200万人に1人。筋肉などが骨に変わります。

◆明石でも魚住中3年の山本育海君がF O Pです。

◆2008年2月、育海君を支援する団体「F O P明石」が発足し、ブログで育海君や病気の情報を発信し、治療法開発につながりそうな活動を続けています。この活動などで、07年にF O Pは難病に指定されました。

◎「神様からの宿題」は育海くんの書いたお話が絵本になったもの。またイメージC Dやライブ活動、絵本の日本語版及び英語版のiPhoneアプリも完成しました。

◆治療薬の研究費にあてる募金も行っています。  
ぜひ、ご協力下さい。

◆問い合わせはF O P明石事務局

(080-3775-2257)

◆<http://www.fop-akashi.jp/>

◆絵本やC Dの販売も行われています。(点字版もあります。)  
絵本は1冊500円(送料別 - 3冊まで送料：飛脚メール便で80円)

メール [ehon@fop-akashi.jp](mailto:ehon@fop-akashi.jp)

D-FAX 020-4622-7570

◎申込方法：メールまたはF A Xにて、お名前、郵便番号、住所、電子メール、電話 番号、注文部数を明記の上、お申し込みください。

◎学校での教材セットもあります。お問い合わせ下さい。

## 明石市文芸祭 文芸祭賞受賞

捨てられないメモ

高阪博一

この七月の初め、薄い桃色の被保険者証が届いた。介護保険だ。この保険は四十歳から加入するが、先ず二十年は使うことがない。六十五歳になるまで、保険証がないので、加入している実感にも乏しい。それが送られてきたのだ。つくづく高齢者であることを痛感した。もう先は長くないのだ。

別に、ご大層な人生を送って来たわけではない。学校を卒業し、就職をして、恋におち、結婚して子供が生れ、一人前に育てて、孫の誕生を楽しみにしている、定年を迎え、孫をあやしなながら日々を過す。ごく平凡な人生だ。こんな人生でも、身の回りを見渡すと、整理しなければならないことも、それなりにはある。これを良い機会に身辺整理をし

ようと思い立った。

どこから始めたものかと考えた。身内が争うような財産は、幸いにして持ち合わせていない。簡単なものだ。机からか、ガラクタを集めたダンボール箱か、本棚か、CD入れかと考えて、一番時間の掛かりそうな、ダンボール箱から整理することにした。先ず、要るものと要らないものの区別だ。それが済めば、要らないものを捨てればいい。簡単なものだ。

ダンボールを開けると、いろいろなものが入っている。感慨を込めていると時間がかかる。見て、捨てる。これに限る。会社関係の書類、こんなものは一切要らない。お世話にはなつたが、一生懸命に仕事はした。五分と五分だ。パンフレットの類いも入っている。何故、こんなものかと思う。これもばつさり捨てた。

次はノートの類いだ。中味は例によつて見ない。捨てようとして持ち上げると、手が滑った。ノートが

何冊か、辺りに散らばって落ちた。ふと見ると、汚れてシミの入ったメモが落ちていた。拾い上げると、俳句と日付のようなものが目に入った。

『柿喰らう御寺を巡る菩薩たち S43-112』  
力の入っていない、さらつとした上手なボールペン書きのメモだった。感慨を込めないという先程の禁は破られた。椅子に坐り直し、じーつとそれを眺めて、厚く重なった記憶の層を掘り起こしていく。古くなりぼろぼろになったものを除いていくと、やつと辿り着いた。まだ、友人同士が主義主張で傷つけ合うことのなかったあの頃の時。

学校の冬休み前に、友人同士で奈良へ行くことになった。学校は京都にあつたので、そこにある有名な寺院には既に行つていた。それで今度は、行つたことのない奈良へ、ということになった。何人で行つたのか、正確には思い出せない。記憶とは当てにならないものだ。だが、あいつがいたことだけは鮮明に覚えてる。

奈良の何処に行つたのだろうか。目を瞑つて思い出してみる。薬師寺には行つた。再建途上とはいえ、金堂や西塔は影も形もなかつた。あの赤銅色の薬師三尊が仮の堂にあつた。そんな場所にあつても、堂々として、脇侍の腰を捻つた豊かな曲線には、優美を感じたものだった。それから、人の疎らな境内を抜けて、唐招提寺に行つたのを覚えている。

四十年以上前のことだ。有名な寺であつても、人は少ない。今のように、何処へ行つても人に出会うというものではない。唐招提寺に行く途中の崩れかけた築地塀を見ながら、あいつが言つたことを覚えている。「京都は雅だけど、何となく騒がしい。奈良は地味だけど、静寂そのものだ」と。

次は、確か法隆寺へ行つたのだ。ほの暗い金堂の中の釈迦三尊を拝み、宝物館に行つたような気がする。多くの仏像などが雑然と置かれていた。現在のように、見せるために並べる式の置き方ではなかつた。その分、宝物との距離は近かつたような気が

する。そして、百済観音に巡り会った。

顔が小振りで背が高く、スリムな体形の菩薩様だ。見る者を、どこまでも優しく包み込んでしまうような気がして、あいつと黙って、暫く眺めていたのを思い出す。「いいなあ」あいつのただ一言が甦る。

この法隆寺を最後に帰ったのだ。次の日、学校であいつが、手に何かを握らせてくれた。それが、このメモだ。「柿、食べてないけど、多少のパクリは勘弁して。菩薩さんは悟るために、努力している途中の姿。我々の姿でもあるけど、あそこまで、優しくはなれそうもないなあ」と苦笑いを浮かべながら。

年が明けると、学園紛争の嵐が吹き荒れ始めた。嫌でも、その渦中に巻き込まれていく。ヘルメットにゲバ棒。あいつの言う、優しさをどこかに置き忘れたかのように、憎悪と暴力とが辺りを支配していった。

あいつとは卒業以来会っていない。年賀状の遣り取りはしているので、無事でいることは分かっている。

る。元気なうちに一度会って、互いにどんな菩薩の道歩んだのか、話してみたい。これは捨てずに取っておこう、あいつと会うその時まででは。

了

◆本年度の明石市文芸祭、その随筆部門の文芸祭受賞作です。是非、次年度は小説などでも、と期待しております。おめでとございました。

パチパチパチパチ……

(亥)

★明石市の文芸祭ホームページでも読むことができます。



「俳句」

冬薔薇

冬薔薇心もとなげに咲いている

冬薔薇いつの間にか咲き 散っていた

冬薔薇白が似合うと君が言う

薔薇の香を冬の大気を胸に充たす

冬薔薇 担当医に会える診察日

冬薔薇に心の窓は閉じたまま

彩さい

華はな



嘘

令月

僕の幼馴染は嘘が死ぬほど下手だ。何かを隠そうとすればするほど目は泳ぐし、焦つて早口になつて、右手で髪をいじる癖がある。だから僕はいつも嘘を見破ることが出来たし、必死になつて僕を誤魔化して逃げようとする幼馴染み、咲を面白く観察できた。

「伊織ー！怪我したから手当して」

「…咲、ここは保健室だからもつと静かに扉を開けてくれると嬉しいんだけど」

中に人がいるということを全く気にし

ていない勢いで開かれた扉は、その反動で殆ど自動で閉まつていた。保健委員長として少し物言いたげに言うが、言われた当の本人は僕の言葉なんてどこ吹く風で椅子に座ると「ん」と右腕をぶつさら棒に差し出した。

その腕を見れば、少しすりむいていた。咲が体操服を着たままだつたので、体育の授業で転んだか何かしたのでろうと解釈して、さつさと手当の準備をしました。

「たく、どこのわんぱくぼうやだ、こんな怪我して…」

「うるさい！不可抗力という言葉を知らないの？」

「不可抗力で怪我されていたら僕の身が持たないよ」

憮然とした様子の彼女に僕は溜息をついてから、消毒薬をしみこませた綿を当てた。最初は染みるのか少し眉根を寄せたが、それで降は黙つて僕の作業を目で追っていた。そんな咲の視線に、ほんの少しだけやり辛くなり再び小さく溜息を吐く。消毒をさつさと終えて、後は自分で貼れと言うように絆創膏を渡すと、咲は意味がわかつたのか黙つて受け取った。

「で、腕以外にどこを怪我したの？」

「へ？どこつて…どこも。腕だけだよ」

「…咲」

「いや、だつて本当だよ。大丈夫、50M走で転んだだけだから…うん、大丈夫ですよ。あ、そろそろチャイムなるから着替えないと！次の先生は厭味が多いからね、早く帰らないとヤバイの

ですよ。じゃ、伊織君そういうことで—」

いつもと同じ癖が出ていることを知らずに咲は僕を誤魔化そうとする。「転んだだけ」辺りから目が泳ぎだし、わざとらしくチャイムの話をしてからは一気に話しのスピードが上がリ、仕舞には右手で髪をいじりだして…完全に嘘をつく時のスタイルだ。

片手をあげて僕の前から逃走しようとしている咲の腕を掴みにつこりと微笑み、「咲？」と問いかければ、暫くして観念したのか項垂れて「はあ」と溜息をついた。

「ほら、他にどこを怪我したのさ」

「…右足捻った」

「やつぱり。どうしていつも隠すのさ。そんなに治療嫌い？」

「いや、捻ったって言ったらゴールドスプレーされるじゃん。あれ、冷え過ぎるから嫌いなんだよね。てか、どうして分かったの？」

「スプレーが嫌なら湿布もあるから、嫌がらずに申告してくれ。それと、僕は基本的に咲の『大丈夫』や『なんでもない』は信用してない」

湿布を貼り、包帯で固定しながら咲の顔を見ると、その表情は悔しいの一言に尽きた。自分の嘘が見破られるのが嫌なんだろうな。何年一緒にいたと思っているのか…嫌でも咲の行動パターンは覚えてしまっている。ただ、咲は自分の行動パターンに気が付いていない。その違いだけだということ。

「どうして伊織にはいつもいつもバレるんだろ」

「それは咲の嘘が下手だからだよ」  
「だからって100%見破られるなんておかしい」

「何年一緒に居ると思ってるの？嫌でも見抜けるようになるよ」

「…こうなったら死ぬまでに伊織をだましてみせる！」

拳を握って立ち上がり変な決意をする咲に今度は僕が溜息をついた。この嘘が下手な幼馴染は変なところで対抗意識を燃やす。それこそ、縄跳びの二重跳びだの、箸の豆掴みだの、お手玉だの…なんでそんなところで対抗意識が燃やせるのか分からない。

そして、変な決意をした咲は「じゃあ、伊織！明日から勝負だからね」と言い残し、豪快に扉を開けて走り去った。

「だから、扉はもつと静かにつて言つたのに……」

(注：生徒が怪我等の治療を行うことは

出来ません)

\* \* \* \* \*

翌日から咲の嘘攻撃は始まった。

始まったと言つても僕にしてみれば日常生活で咲の嘘を聞くことが多くなつたくらいだつた。しかも、全てがバレバレの……。たまに微妙な嘘をついてくることもあるが、咲の癖が出るのですぐにわかる。何度負けても次の日にはまた幾つもの嘘を考えこくる。その根性にはつきり言つて認めるが、嘘を考える前に僕が話を聞いているときに、咲のどこを見ているのかに気付くほうが手つとり早いと思う。

それでも咲は毎日僕の所に来る。

嬉しそうに、悲しそうに、驚いたように、自分の作つた嘘を本当の事のように言う。けれど、目は泳ぐし、早口だし、右手は髪をいじっている。その様子が微笑ましくて、少しでも長くからかいたくて最初は騙されたふりをする。でも最後に「咲、嘘でしょ」というと悔しそうな顔をして走り去る。「明日こそ勝つてやるー!」という言葉を残して去つていく。明日も僕の所に來てくれるという咲の言葉が嬉しくて毎回、笑みがこぼれてしまう。クラスメイトには「気持ち悪い」と言われるが、それでも僕は嬉しかった。

連休明けの日、咲は来なかつた。いつもなら休み時間になつた途端に教室に駆け込んでくるのにどれだけ待つても来なかつた。嘘が思いつかなかつたんだらうか。それとも降参したんだらうか。

うか。色々考えたが分からなかつた。帰り際に咲のクラスメイトに会つたので聞いてみると、今日は体調不良で欠席とのことだつた。健康優良児である咲が珍しいとも思つたが、まあ咲も人間だつたんだなど自分の中で改めて思い、その日は特に何も気にしなかつた。

けれど、次の日も、その次の日も咲は学校に来なかつた。長引く風邪だなど思うだけで僕はお見舞いに行こうとは思わなかつた。今更つていう気恥ずかしさもあつたし、保健委員会の活動も忙しかった。試験もあつた。結局、僕が気になつて咲の家を訪ねたのは、咲が欠席をしだしてから2ヶ月も経つていた。

しばらく見ていなかつた咲の家の前に立ちチャイムを押す。久しぶりに会つたおばさんが驚いた顔をしていた。僕は世間話のように咲の話をしたの

に、次の瞬間、崖から突き落とすような現実を聞かされた。

\*\*\*\*\*

電車で一時間ほどの場所にある大きな総合病院。そこに咲は入院していた。入院していたなんて全く知らなかった。あれだけ近くに住んでいながら僕は咲の事を何も知っていなかったんだと思うと、咲の名前が書かれた病室の前で立ち止まる。

今更何の用だと言われるかな。2ヶ月も知らなかったんだと言われるかな。いや、そうやって厭味と言われるならまだましだろう。初対面の人のように扱われたり、無視をされたりする方が辛い……。けれど、そうされても文句を言えないのは自分なんだと言いつつ聞かせ、震える手で扉をノックする。

「はい」

2ヶ月ぶりに聞いた咲の声は以前より小さくなっていたような気がした。恐る恐る挿んだ取っ手をスライドさせながら扉を開けると、真っ白い部屋の真っ白いベッドに咲がいた。

「……え？伊織？！」

「あ、昨日……おはさんに話を聞いて」「あつちやゝお母さん、何ばらしてんだか」

「入院してたなんて知らなかった。言ってくればよかったのに」

「怪我や病気に煩い保健委員長様に『入院します』なんて言ったら、また延々とお説教かな」と思つて」

咲は僕の顔を見て驚いていたけど、話

をしだすといつもの咲だった。少し顔色が悪いようにも見えたけど、それはきつと病室の白さがそう見せているんだと思つた。ベッドサイドに椅子を置いて、学校の事や行事の事、家であつたことなど他愛のない話をした。

咲は久しぶりに会つたからか、いつもより大袈裟なリアクションをして、学校での話や家での話を聞いていると、学校で話したりしていた。その様子を見て僕は何だか安心した。何ヶ月も入院していると聞いていたから、もしかしたら深刻な病気なんじゃないかと思つていた。でも咲はとても元気そうに見えるし、もしかしたらもう病気が治つて今は静養中なんじゃないかと思つた。

「咲、いつまで入院するの？」

「え？もおゝ普通乙女に外泊日程聞

く？」

「乙女つて誰が？」

「え？伊織の目の前にいる私以外に乙女がいる？（笑）まあ入院はいつまでかな？私特に気にしてないし……てか、学校を堂々と休めるからいいね！」

そう言つて笑つた咲に「勉強遅れて泣くのは咲だよ」というと、その場合を想定したのか嫌そうな顔をした。僕はそんな咲を見て、笑つた。すると咲は嫌そうな顔から一変して、怒つて僕の頭を軽くはたく。いつもの喧嘩のパターンに、僕はさらに笑い声をあげ

る。「もう！いいもん、勉強遅れたら伊織に教えてもらうから」

「僕に聞く？僕も成績そんなに良くないよ」

「知つてるよ……以前の中間、数学0点で呼び出しくらつたし」

「あ……それは、解答欄を一個ずれて書いてやつただけだよ！」

「そんなの受験時の言い訳で通用するわけないでしょ」

尤もな咲の言い分に反論が出来ずに詰まつてしまふ。落ち込んだ僕に咲は笑つて頭を撫でながら「ま、私の扱いは伊織が一番よく知つてるでしょ」と言つた。小さい頃から一緒で、誰よりも互いをよく知るからこそ言える言葉。咲を一番よく知つているのは僕で、僕を一番知つているのは咲で、ずっとずっとその位置だけは互いに、誰にも譲らなかつた。僕も笑いながら「当たり前でしょ」と返すと、二人して見つめあつて笑う。まるで小さい頃に戻つたみたいに笑つた。

\* \* \* \* \*

僕はあの日から毎日、咲のお見舞に行つた。今まで行かなかつた罪悪感もあるが、それよりも話したいことが山ほどあつた。学校に来られない咲の代わりに僕が見たことや聞いたことを伝えたかつた。僕が話をしている間、咲は目を輝かせて話を聞いているし、嬉しそうに、楽しそうに笑う。だから僕は毎日来ようと決めた。僕に出来るのはそれしかないから……。

「あ、伊織！今日も来てくれたの？」

そう言つて、咲は笑いながら手を振つた。咲のいる白い病室は無機質で、そのベッドに座る咲は最初に見た頃より血の気がなくて、今にも周りの白さ

に溶け込んでしまひそうだった。以前より細くなつた腕には、無機質な点滴の針が刺さつてゐる。その中に流れる薬の効果を僕は知らない。お見舞いに来るたびに中身が変わつてゐるから、なんの薬が流れてゐるかなんて知らない。ただ「また変わったんだ」と思うだけだった。

「で、今日の土産話は？」

「来るなり話をねたるか……今日もありがとつ、なんて劳いの言葉は？」

「一週間皆勤した時点で言う気なくしたわ。にしても、本当に毎日よく来るよね。委員会はどうした？」

「もう引き継ぎも終えて、僕は元保健委員長。引退した奴がうろつてると嫌がられるよ」

「ははあ、ん、やるのがなくなつて愛しい愛しい咲ちゃんに慰めてもらいた

いわけか！」

「……さ、顔も見たし帰るか」

「わ、嘘嘘嘘！ 今日もありがどう！ 毎日来てくれて嬉しいわあ」

椅子に座つて少し話しただけで帰ろうとする僕を咲が慌てて引き留める。僕の腕を掴んだ咲の手が冷たくて、細くて一瞬、寒気が走つた。それでも咲の顔を見ればいつも通りで僕は「気のせいか」と自分に言い聞かせた。

椅子に座りなおして、咲に今日あったことを話す。授業中の先生の失敗や、クラスメイトがマンガを読んで没収された話、友達とのやり取り、何度か同じ話を過去にしたかもしれないけれど、咲は何も言わずに聞いてくれる。僕は話を聞いている咲の顔が好きで、毎日必死に頭の中で今日の出来事を振り返つて話をひねり出す。

本当はポケットの中のメモ帳に沢山の話題を書いているのに、それを見て話をするのは何だか恰好悪いから、いつも電車の中で確認している。それでも、なぜか話す時には緊張してしまふ。何度か嘘も混ぜて話したけれど、咲は気づいてない。だって、咲は嘘をつくのが下手で、見破るのも下手だもの。だから、今や僕の話は嘘か本当かが自分でも分からなくなつてゐる。

気がつけば窓の外が薄暗くなつてゐる。時計を見れば六時を指してゐて、もう帰らなければならぬ時間だった。

「それじゃあ、今日はもう帰るね」

「あ……もうそんな時間か。伊織の話つて面白いから、いつも時間が経つた忘れるわ」

「そう言つてもらえると嬉しいよ」

「また、明日も…」

「あ、それと明日から暫く来れないんだ。」

「え…」

「ほら、今度、受験対策の一斉模試があつてさ、その対策補習があるから」

「そ…か」

咲は少し寂しそうに言った。なんだかそれが凄く申し訳ない気持ちになつた。

「大丈夫？なんなら少し遅くなるけど来ようか？」

「え…いいよ、大丈夫」

「でも寂しそうに見えたけど」

「なんでもないよ、気のせいだつて」

強がつて言っている様子の咲を僕はじつと見る。咲の嘘は見抜けるから、強がりと言つたつて駄目だよと笑つて言い返してやるつもりだつた。でも、咲の様子はいつも通りで、嘘をついている様子はなかつた。僕の気のせいか、そう思つて安心した。そうだ、咲は強いし大丈夫だと自分で勝手に解釈した。

「それじゃあ、またね」

そう言つて去つて行つた僕を見送る咲が、どんな行動をしていたのか僕は知らなかつた。

\*\*\*\*\*

模試の対策補習が終わつて、久しぶりに咲のところに行こうと思つて家を出ると、咲のおばさんがチャイムを

押すところだつた。

「あれ、おばさん？」

「あ、伊織君…丁度良かった。伊織君に用事があつて」

「僕に？あ、でも僕これから咲の病院に行くんですけど」

「その咲の事でね…」

「？」

\*\*\*\*\*

外は明るい天気なのに、僕の部屋はカーテンを閉め切つて薄暗い。座り込む僕の目の前には一通の手紙。咲から僕に宛てられた最初で最後の手紙。もう居ない、会えない咲からの最後の…。



——咲は三日前に亡くなつたの。病気が進行していて、入院した時点で助かる見込みは殆んどなくて：気休めの入院だつたの。それでもあの子、伊織君が来てくれるようになってからは本當に嬉しそつだつたわ。私が一緒にだど恥ずかしいのか、伊織君が来る時間が近づくと「早く帰つてよ」つて言われて。本當にありがとう。これ、咲から預かつていたの。伊織君に渡して欲しいつて。あの子、強情だから言いたいこと自分で言えなかつたのかしらね。それとも、こうなること見越していたのか：変なところで勤が鋭い子だつたから自分の死期も悟つていたのかもね。伊織君、受け取つてあげて。あの子か

らの最後の言葉だから。

手紙の宛名には「伊織へ」と良く知る字で書かれていた。けれど、その字は僕が知つている字よりも力強くはなかつた。細く、頼りなげな字で、知つているはずなのに知らない字のようだった。

震える手で封を切れば中には簡素な便箋が三枚。中にはびつしりと字が書かれていた。

「伊織へ」

対策補習頑張つてる？頑張つて、受験のときには解答欄間違えずに書けよ(笑)

うん、今更手紙なんて何書けばいいんだろつて悩んでます。

考えたら伊織とはいつも一緒だから手紙書くよりも会つて話す方が早かつたよね。だから改めて書こうとすると難しいんだ。うん、解決！

ま、冗談は置いて今回手紙を書いたのは、きつと私が次に伊織に会うことは出来ないから。保健委員長にこんなこと言つたら「縁起でもないこと言つな！」つて怒られるかもだけど、私の体の事は私が一番よく知つてるよ。医者も家族もなにも言わないけど、聞かなくたって体は私に教えてくれるよ・・・命の残量つてやつを。でも、これを読んで伊織は悲しまないでよ。だって伊織は何も悪くないんだもん。医者も家族も、私も悪くない。悪かつたのは運だけ。だから、自分を責めたりしちゃだめだよ。そんなことしたら私

が許さないからね。

ねえ、伊織は覚えてる？私が伊織に宣言した、死ぬまでに伊織をだましてみせる！ってやつ。結局、学校に居る間は全然成功しなかったな。伊織ってばすぐに見抜くんだもん。悔しかった！でも、知ってる？この勝負は私の勝ちだよ。

伊織と最後に会った日、私言っただよね。「大丈夫だよ」「なんでもないよ」って。伊織、最初疑ってたけど最後は納得したでしょ？私の「大丈夫」と「なんでもない」は基本的に信用しないって言うってなのに、笑実ほね、あれ嘘だったんだ。しばらく伊織に会えないのが怖かった。もう自分の命の残量は殆どないから、ぎりぎりまで会いたかったのが本音。でも、受験の邪魔は出来ないし・・・私、一世一代の嘘ついたよ。目、泳いで

なかったでしょう？早口じゃなかったでしょ？髪の毛、触ってなかったでしょ？

何？驚いてる？伊織がどこ見て判断しているかくらい知ってたよ。何年の付き合いだと思ってるの？私の癖見て「してやったり」な顔して「嘘でしょ」っていう伊織の顔が好きだった。

でも、最後の勝負では見れなかったな。ちよつと残念。ま、伊織に宣言したことが叶ったと思えばいいのかな？試合に負けて勝負に勝った？ちよつと違う？うん、でもいいや。最後の方、伊織と毎日、昔みたいに話せて楽しかった。それだけ。

ねえ、伊織・・・私はもう無理だと思っただ。息をするのがしんどい、起きるのも辛い、体が痛いて悲鳴をあげてる。もう休んで

もいいよね。もう身体の束縛から解放されてもいいよね？だって・・・私長い間頑張ったんだもん。

伊織の幼馴染でよかった。最後に見た伊織の顔が安心してる顔でよかった。だから悲しくないよ。私の中の伊織はずっと笑ったままだもん。ありがと、伊織。咲」読み終えた手紙に涙が零れおちる。字が滲んでいく。咲の最後の命の輝きの字を消したくなくて、慌てて拭く。

騙されていたのは自分だったんだ。咲は全部知っていた。知っていて嘘をうっていた。そうだよ・・・咲は嘘をつくのが下手だったのに、どうして気付けなかったんだろう。

何でもないと笑っていた君。

どうして見抜けなかつたんだらう。  
嘘をつけない君の渾身の嘘を。



地球は青かった

表紙写真はナシヨナルジオグラフィックからのものです。スペースシャトルは昨年で退役しました。

人類の宇宙開発の大きな出来事の一つでした。

私たちの生きた、或いは生きる、20世紀、21世紀は、「宇宙大航海時代」と言われます。

もともと「大航海時代」というのは、15世紀半ばから17世紀半ばまでを指します。オスマン朝トルコがヨーロッパからインドへの地中海ルートを占領したため、新しい航路を捜したのが始まりです。羅針盤が伝わったり、頑丈な船が作られるようになったりしたこと背景にあります。1492年のコロンブス、アメリカ大陸発見というのは有名ですね。尤も彼はインドに到着したと考えていたようですが…。

人類史上初の月面着陸は1969年、アメリカ合衆国のアポロ11号計画における船長ニール・アームストロングと月着陸船操縦士エドウィン・オールドリンによるものでした。

アメリカが月面着陸を成し遂げたのは、今はもう存在しません、ソビエト連邦との競争でした。

1917年にロシアで革命が起きて、人類史上初の共産主義国家ソビエト連邦が誕生しました。それが崩壊したのは1991年。

**★ 大学生でこのソビエト連邦を知らないというケースがたくさんあります。**

この間、アメリカとソビエト連邦は核戦争に至らない、にらみ合い、冷たい戦争（コールドウォー）を繰り広げました。アメリカは資本主義、ソビエトは共産主義（社会主義）で、世界中で対立が起きました。第二次大戦後、ドイツ、ベトナム、朝鮮に分裂国家が生まれました。

**★ 映画「007」の、古い作品は、ソビエトとの争いが描かれています。**

その競争のひとつが宇宙進出で、まずソビエト連邦が、スプートニクという人工衛星を打ち上げ、「スプートニクショック」がアメリカを襲いました。科学技術の遅れ、教育の必要性が指摘されたのです。ソビエトは、その後、犬を宇宙飛行させ、それから人類初の有人飛行として、1961年、ガガーリンを宇宙軌道にあげました。

「地球は青かった」「神はいなかった」の言葉は有名です。さらにテレシコフという女性も宇宙に送りました。「私は

カモメ」という彼女の言葉も有名になりました。

（ガガーリンの言葉もテレシコフのものも日本で翻訳されて、有名になったもので、原語とは少しニュアンスが違います。）

このソビエトの動きに反発して、アメリカのジョンソン大統領に続くケネディ大統領は1960年代に人類を月に送る計画を推し進めたのです。

アポロ1号は発射台上での火災事故で、3名の飛行士が死亡しています。それでも続けられたアポロ8号で人類は初めて月の裏側を見て帰りました。

なにせ、今の卓上電卓程度のコンピュータもない時代です。アポロ11号12号に続くアポロ13号は途中で事故を起こし奇跡的に帰還しました。

★映画「アポロ13号」はこの事故を描いたものです。

月面着陸を初めてしたアポロ11号の時代、1969年当時、私は22歳でした。

「もう10年もしたら月に基地が出来て、火星へも行っていかも知れないなあ」と思いました。が、40年以上経っても、まだ地球の周りに留まっています。

アポロ計画以後、月面探査の無人機、火星への無人機、

そして日本も、はやぶさを小惑星イトカワまで飛ばして微粒子を回収するという離れ業を成し遂げました。

けれど人間は、まだ国際宇宙ステーションで長期滞在の練習中です。

多分、私が平均寿命（余命）で死ぬまで、あと14、5年の間に、火星にいけるかどうかもう危うい感じですから、それくらい宇宙旅行は大変なのです。

多分、人類全体の熱気、国家間の先陣争いと言った環境もないと、なかなか巨額の費用を投入して宇宙へ乗り出すのは難しいでしょう。事故もありました。1986年スペースシャトルチャレンジャーは打ち上げ直後に爆発し、7名の宇宙飛行士が死亡しました。停滞はあったもののシャトルは飛び続け、国際宇宙ステーションが誕生しました。日本は観光バス程の大きさの輸送機「こうのとり」を作り独自に打ち上げています。また実験棟「希望」を国際宇宙ステーションに接続しています。

確かに費用がかかる宇宙より、貧困や病気、大きな格差といったものを先に解消する必要があるのかも知れません。ただ、私は、貧しくても、夢は持ち続けたいと思います。ですから、宇宙開発の努力は続けて欲しいと考えています。

なにより戦争によつて技術革新が起こつた世紀から、

宇宙開発でイノベーションの起こる世紀にしていきたいものだ、日本の片隅で私は考えています。

★上の写真は「こうのとり」

ただ、中国が国の威信をかけて宇宙に乗り出しました。ひよつとすると火星一番乗りは中国かも知れません。

有名な映画「2001年宇宙の旅」

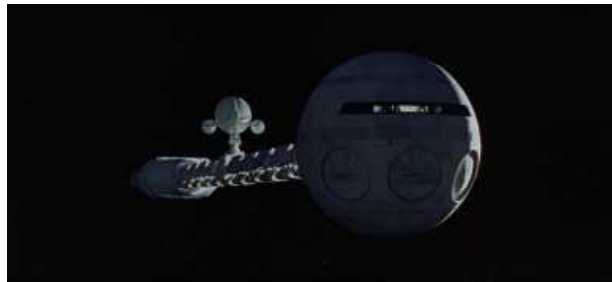


(1968年)の続編、「2010年か2020年」では、中国の人工重力を発生しつつ進む巨大な宇宙船が描かれていたと思います。

しかし、CGのない時代に作られたこの映画は、今見てもちやちな感じがしません。世界最高の映画の一つと評されています。凄いですねえ。私は3度は見えています。

さて、一方、アメリカは宇宙開発の主軸を民間企業に移しました。

米宇宙ベンチャー・スペースX社は、地球から火星に8万人を移住させる将来構想をたてました。今世紀前半



中に繰り返し使える巨大なロケットを開発して人類を送り込み自給自足できる居住区をつくるそうです。飛行費用は1人50万ドル(約4100万円)とい

います。  
日本も独自の技術で、できれば「宇宙大航海時代」の始まりに参加して欲しいなあと思っています。そして可能なら火星に着陸した日本人を、生きている間に見てみたいと夢見ます。厚かましいか……。

「亥一郎」

※因みに人工重力は、どの宇宙映画にも出てきます。長期間の宇宙の旅には必要だそうです。名前は大層ですが、今のところは、ぐるぐる回転して遠心力を重力の代わりにします。

或る夜の電話

高阪博一

夜の電話は良くないことが多い、殊に十時を過ぎると。いつも電話に出る女房が辺りに居ない。出たくはなかつたが、仕方がない。受話器を上げた。「山本ですが」と言うと、「俺や。鈴木や」と低い声が聞こえた。

「何や、鈴木か。久しぶりやな。今頃、どうしたんや」

「おまえの声が聞きたくなつたんや。一人でこんな所に居ると、無性に人の声が聞きたくなるもんやね、この時間帯は。静かなもんやで、ここは」

「どこに、居るんや。飲み屋では、なさそうやな。変なカラオケの声も聞こえ

んしな」

多少の苛立ち紛れに、わたしは皮肉っぽく聞き返していた。

「大阪のど真ん中にあるカラオケ・バー、違う、違う。病院や。それも、電灯がぼんやり点いてる待合のソファ。病室では、携帯、使かえんからな。何で、おまえ、携帯を持ってないんや。あつたら、用件だけで済んだのに」

わたしは携帯電話も、パソコンも持っていない。別にできない訳ではない。あの種のもの、仕事に至つて便利だが、生活に必要なとなれば、なくても生きていける。なくても良いものを、敢えて持ちたいとも思わない。女房に言わせると『平成の化石だ』そうだ。「何で、そんなところに居るや」

「病気やからやろ。ハイボール飲んで、カラオケ歌う為に、こんなところには、おれへんよな」

「わざわざ、冗談言いに電話したんか。それも、この時間に」

わたしの声が、若干怒気を孕んで大きくなった。こんな時間に冗談もなからう。ちよつとした沈黙の時間が流れた。

「癌やねん、俺」

「ええ、何やて。癌！ 鈴木、ほんまか」

驚いて受話器を握る手に力が入つた。次の言葉を必死に探す。不意を衝かれると、すぐに言葉が出てこないものだ。わたしは深く息を吸つて、言葉を繋いだ。

「身体のどこや。それでどんな具合なんや」

「話しているとき長くなるから、あした、悪いけど来てくれへんか。A病院や。場所は難波<sup>ナニワ</sup>の宮の横。大きい病院やから直ぐ分かるわ」

大阪生れで、大阪育ちのわたしだ。場所は直ぐに見当がついた。

詳しく病状を聞きたかったが、電話でぐずぐず聞いても、もどかしいだけだ。気にはなつても、早い目に切上げた方が得策だとわたしは思った。電話口で、変な涙声を出したり、薄つづらな同情の言葉は言いたくない。

「分かった。サンデー毎日の身やから、オールタイム、オーケーや。いつでも、ええんかいな」

「手術に関する先生の話が、午後の四

時からあるんで、一緒に聞いて欲しいんや。それで、その前に、いろいろ話もあるし。一時間ほど前に来てくれへんか。頼むわ。そんなら、また、あした」

「ちよ、ちよつと、待つた。病室はどこなんや、何号室なんや。変われへんな、その慌てもんぶりは」

「ああ！ 忘れるとこやった。ごめん、ごめん。九階の内科、九百七号室。苦しんでも、ラッキーセブンや」

必死で明るく振舞おうとしているあいつの顔が、浮かんできた。もう、これ以上喋るのを止めようと思った。

「あしたなあ」

「悪いな。ほんま、悪いなあ」

カのないあいつの声が、聞こえなくなるのを待つて、受話器を下ろし、ふーと大きな溜息をわたしはつけた。

振り向くと、女房が後ろに立つていた。「鈴木さん、どないしたん？」

「何で、鈴木やて、分かるんや」

「あんな大きな声、出してたら、秘密も何もないやないの。こんな小さな家やから、どこからでも聞こえるわよ」  
自分では大きな声を、出しているように思わなかった。驚きがそうさせたのかもしれない。女房にあいつからの電話の内容を、手短かに話した。

「鈴木さん、一人やし、不安やろうね。あなたと、同い年やから六十三か。まだ、若いけど…」

「こんな時に、一人はなあ。言ったところで、仕方ないけど、子供がおれへんし、大企業やないけど、そこそこの会社で役員までしてたから収入も結構あつたし、俺と違つて、ダンディーやつ



たし、再婚出来る条件は揃っていたけどなあ」

「そやね。条件は良かったよ。何年になるかしら、奥さんが亡くなつて」

「もう、かれこれ十年程度やろう」

「突然、やつたね」

「朝、目が覚めると、冷たくなつてたんですよ。眠る時は、あんなに元氣やつたのに。起きたら、黙つたまま、動けへん」

「つて、あいつ、言うてたなあ」

「子供さんがなかつたから、あれから、ずっと一人か……」

「そうや。兎に角、明日、行つて詳しいことを聞いてくるわ」

「そうしたげて。物凄く、氣心の方かっている人に会いたいと思うから。それで、何時に家を出るつもりなん」

「午後の三時に、大阪の病院やから、

余裕をみて、一時過ぎの電車かな」  
「分かつた。最近、J R、事故が多いから、ちよつと早い目がええよね」

わたしは四十代で、播磨の小都市に転勤した。そこに、会社は数十人程度の工場を持っていた。部下数人の製造管理の仕事を、のんびりとこなしていた。会社での立場は、もうほとんど確定し、その頃は、先がはつきりと見えていた。

そんな氣持が反映したのかも知れない。この小都市が氣に入つてしまつた。こは、温暖で、人が少なく、都会のようにゴミギスギスしてないのがいい。適当に都会と離れているのも氣に入った。多少の心残りはあるも、大阪の家を引き払うのに、躊躇は無かつた。女房は何かと抵抗したが

説き伏せた。引つ越して、ここに住んで、もう二十年近くになる。

あいつは大阪の中堅商社で順調に昇進し、役員になり、トップを目指して、忙しく働いていた。会つて話をして、仕事の話になる。その時の、身振り手振りを交えた熱い語り口は、羨ましくもあり、危ないような氣もしたものだ。

男女の關係でもそうだが、遠く離れていると、氣持ちまで遠ざかつてしまふ。人の關係の濃密さは、会う頻度に正比例するものだと思う。それに、あいつが役員になつたことも、微妙に、わたしの心の襷に棘を刺していたのかもしれない。五十も過ぎた頃から、徐々に会う機会が少なくなつていつた。「久しぶりの大阪やね」

女房が羨ましそうに言うのだった。

確かに、大分長い間、二人で都会には出ていない。動くことが、この歳になると、億劫になってくるのだ。大阪生れの女房が、そういうのも無理はなかった。もう、大阪に家はなくても、生れ故郷は恋しいものだ。

「迷うかな？」

「迷うはずないでしょ。そやけど、変わると思うよ」

「大阪のキタもミナミも、それに天王寺も、工事ばかり、みたいや。新聞によろ出てるよな。変わってるやろうなあ」  
「あの辺、知ってるの。お互い、家のあったところとは、全く違う場所やもの」  
「会社の仕事でうろろしたことはあるよ。キタやミナミほどやないけどな。」  
まあ、梅田で地下鉄の案内図を見て

行くわ」

「それが正解やね」

今度は、女房が何となく<sup>イタ</sup>労わるような声で、わたしに吹きかけた。

あいつはどうしているだろう。多分、眠られぬ夜を過していることだろう。寝返りを何度も打つ。そうしたところで、眠られぬことは分かっている。それでもしてしまふものだ。あいつの顔が浮かんだ、疲れて妙に老けた顔が。「もう、寝るわ」わたしは階上の寝室に向った。

翌日は晴れた日だった。風のない明るい日だった。それでも、師走。時々吹く風は冷気を含んでいた。午後一時過ぎの電車に乗った。ウィークデ이의昼下がりに立っている人は、ほとんどいない。日の当る方の座席に腰を下ろし

て、車内を見渡した。

そう離れていないところに、高校生らしい数人が立って話をしていた。時々、笑い声が洩れてくる。多分、二期の定期考査が終つて、ちよつどのんびりという感じの屈託のない笑顔だ。あんな時もあつたんや、と頭の中に言葉が浮かんだ。

「履修届のここ、どう書くの？ 大学つてどこはややこしいね」と隣に居る長い髪の細面なひとに尋ねかけた。薄いブルーのセーターを着ていたのが、妙に印象に残っている。当時は、黒い詰襟の学生服を着ている者がほとんどだった。そんな中でのセーター姿は、目立って、記憶に残っているのだろう。「こう書いたら、ええんや。別にややこしくないよ。集中して、よう聞いたら」

とそのひとが柔らかな大阪訛りで、ぴしやりと答えた、人懐っこい笑顔を向けながら。ガイダンスが終つて、各々専攻別の教室に行くことになった。坐つて、前を見ていると、後ろから肩を叩くひとがいた。振り返つた。あいつだつた。「横、坐つてもええ？」

それから、もう四十数年が経つた。赤ん坊の泣き声が、聞こえたような気がした。はつと我に返り、ぼんやり窓の外を眺めた。落葉した木や小さな池のキラキラ光る表面が、後ろの方へ飛ぶように移動していく。何となく、言いようもない寂しさを、わたしは感じた。「六十三か。もう、そんな歳になつたんやなあ」独り言が、対向列車の擦れ違ふ大きな音に、消えていつた。

大阪駅に着いた。想像以上に大きくなつており、おまけに大きなドーム型になつていた。「へえ。えらいもんや」とお上りさん気分で、地下鉄の梅田へ降りていつた。梅田は案の定、あちこちで工事をしてた。路線図で病院の最寄駅を確認して、乗ると十五分も経たないうちに、駅へ着いた。どこの出口から上に出ればいいのか、分からなかつたので、駅員に聞くと、三番の階段を上れと言われた。上ると大きな病院が、目の前に現れた。

病院というところは、ほんとうに分かり難い。大きな病院は尚更だ。案内板を見ても、方角が分からず、いろいろな料があり、おまけにそれが入り組んでいる。やつと、エレベーターを見つけ、あいつの言つた『苦しんでも、ラッキ

ーセブン』の九百七号室にたどり着いた。部屋は二人部屋だつた。仕切りのカーテンをそつと開けると、「すまんなあ」とあいつがこちらを見て、身体を起こしていた。

「そんなに、痩せてないやないか」  
「そうやろ。見た感じは、健康優良児や」

「今時、そんなこと、言わんやろ」  
「そしたら、健康優良老人か」  
「そんな、冗談ばつかし言わんど。どやねん。身体は？」

わたしは多少安心して聞いた。顔色は赤みが指し、やや痩せたか？と思ふ程度で、想像していたより、元氣そうに見えた。外を歩いている普通の人と、全く変わらないと思つた。「山本よ、下の喫茶店でも行こか。いろ

いろ話もあるし。二階にあるから」  
「起きても、ええんか」  
「大丈夫やで。痛いも、痒いもあらへん」

そう言いながら、ベッドから立ち上ったあいつの後ろについて、わたしは歩き出した。腰の辺りの筋肉が落ちて、ほつそりとなり、やや前屈みに歩くあいつの後ろ姿を、黙つて眺めながら。

「胃なんや。初期癌と進行癌との境やそうや。手術して、生存率、五年で六十、七十%だそうや」と喫茶室の椅子に坐るや否や、あいつが言つた。五人手術しても、三人強しか生残れないということだ。大変なことだと思つてみても、特に医学の知識をわたしは持ち合わせている訳ではない。そうはつきり言われれば、聞いているしかない。

「十二月十四日の九時半から手術や。今日が十日やから、あと四日や。それで、医者から手術の説明が今日あるんやけど、家族に聞いてももうた方がええと言われたんや。家族有れへんと言つと、友達ぐらゐるやろと言うんで、おまえに、連絡したという訳や」

「それは、一緒に聞くけど、いつから入院してるんや」

「ちよつと三日前の、十二月七日からや。六十歳で、会社辞めてから、年一度は健康診断を受けているんやけど、引つかかたんや。大きな病院で精密検査した方がいいと言うんで、こを紹介してもらつたんや。あつけなかつたなあ。胃カメラ飲んだら、はい癌ですつて感じやつた」

あいつが淡淡と、ひとごとのように話をする。そうか、そうかと相槌を打ちつつ、聞いているしかない。注文していた飲物が運ばれてきた。喉が渴いているのに、特別飲みたいとも思わなかつた。

「それで、頼みがあるんや」

「何でも聞くから、言うてみいや。先に言うてくけど、金はないで」

「おまえも冗談、言うよなあ」

「ごめん、ごめん」

「そんなん、よう分かつてる。おまえ六十で会社を辞めて、年金生活者やろ。小銭稼ぎはしてるみたいやけど。お金持つてるなんて、思つてない。そんな、お金の話やないねん」

何か思いつめたようにあいつがわたしを見ている。視線を逸らさず見返

していると、あいつがまた喋り出した。「十四日の手術の日なあ、悪いけど、来てくれへんか。一人で手術室に入るのは、ちよと怖いし、それに淋しい」

今まで、弱音を吐かない奴だった。表情に滲ませる時はあつても、じつと堪えて、こんな言葉は吐かなかつた、たつた一度の例外を除いては。いつものあいつではない、別のあいつが目の前に居る気がした。何かこみ上げるものが、わたしにあつた。それを、何とかぐつと堪えた。

「そんなことは、お安い御用や。何時に來たらええんや」

「どうも、九時前には手術室に入るようなんで、八時過ぎに来てえなあ。山本のとこからは、二時間弱か。朝まだ暗いなあ。寒いやろうなあ。雪がちらつ

いたりして。まるで、赤穂浪士の討入りやないか。それで、切腹か。巧いこと、なつてるなあ」

「また、そんな冗談言うて。そんなん、気にしなさんな」

「有難うなあ。そろそろ、病室に戻るうか。医者が来るかもしれん」

あいつがそう言うので、まだ早いよ  
うな気がしたが病室に戻つた。

医者は三十五・六の感で、てきば  
き話をする人だつた。パソコンの画面を  
出して、ここが病巣、これを切除する  
が、四・五時間かかるし、何種類か  
のリスクもあることを説明していた。

自分の息子のような医者の説明を、  
あいつはじつと聞いていて、時折質問も  
していた。医者は妙な慰めの言葉を  
言うことがなく、明確に病状を説明

し、処置を的確に言うだけだつた。若  
いが、信頼できそうな医者となつたに  
は思えた。

「質問がなければ、ここに、サインを」  
と促され、あいつは手術承諾書に署  
名した。何となく、細い指だつた。ちよ  
つと震えているようにも見えた。その  
紙を持つて、医者は部屋を出て行つ  
た。

「若いけど、無駄なことを言わん、ええ  
医者やないか」

「俺も、そう思うわ。変に、慰めを言わ  
んのがええやろ」

「そやな。医者の話では、まだ、二・三  
検査があるようやないか」

「そや。検査がある方がええわ。気が  
紛れるもんなあ」

「そやな。まあ、話したなつたら、また、

電話してこいや。出来れば、明るいうちに」

「ありがどうな」

「今日はこれで帰るわ。また、手術日に来るから」

「悪いなあ」

「何回、おんなじこと言うんや。怒るで」

「ああ、怖<sup>コ</sup>わ」

手術が終わった時も、こんな会話が出来ればいいとわたしは思った。一人一人、少なくなっていく、わたしの周りのこの頃を思い出しながら。

良いことはなかなか遣つて来ないのに、悪いことは直ぐに遣つて来てしまうものだ。前日は余り眠れなかつた。別に、わたしが手術を受けるわけでは

ないに。目を閉じると、あいつのことか、どうしても浮んでくる。デモのジグザグ行進で、しつかり握り合つた手の力強さや、就職して、二人で飲み会をする、留年もせず、四年で卒業した者同士の後ろめたさで、酒を呷<sup>ア</sup>つたことやらを思い出していた。

「鈴木も寝られんやろうなあ」

「そうやろうね」と女房が寝返りを打ちながら、静かに呟いた。

うとうとしたのかも知れない。カーテンの外をそつと覗いた。まだ、暗い。布団を捲ろうとすると、「もう、そんな時間？」と女房が小さな声を出しながら、こちらを向いた。

「そやなあ。起きな。今日は長い日になるやろうなあ」と重い頭をわたしは軽く振った。起き上がると、冷気がい

つきに身体を包んだ。「おお、寒ぶ」自然に言葉が口を衝いて出た。

家を出て、コート襟を立て、駅に向つて歩き出した。いつもより、早足だと分かる。時間は充分あるというのに。電車の着く大分前に、人の少ないプラットホームに立っていた。息を吐くと、煙のような白いものが辺りに拡散していく。まだ暗い空を見上げると、冴えた光を星が放っていた。小刻みに足を動かしていると、電車が滑り込んで来た。ラッシュには早過ぎる時間だ。明るい照明、疎らな人、暖かな車内、何となく落着いた気分になつて、座席に腰を下ろした。

電車は時間通りに走っている。心配していた事故は起こっていない。この調子なら、八時也大分前に着きそうだ。

昨夜の寝不足がたたつている。だが、車内で眠れはしない。二十分も走つただろうか。海の見えるところに出た。反対側の山の稜線から、薄紅い光が見えて、徐々に、黄みを増し、空は闇から瑠璃色に変わりつつあつた。暗い海の面に、波が小さく立っているのが、仄かに見え出した。確実に時間は動いているのだ。

梅田はもう人で混雑し始めていた。昔はこの混雑を何とも思わなかつた。当り前の光景だつた。今は違つた。人の少ないところに住んでいると、この人の多さは尋常と思えない。最寄り駅の駅に着いたのは、七時半頃だつた。予想通り、早く着いた。受付前のソファーには、既に大勢の人が、坐つて待つていた。ひよつとして、あいつは寝てい

るかもしれないと思い、缶コーヒーを買い、ロビーに坐つて、それを飲んだ。甘つたるくて、苦い液体が喉を通り過ぎていった。

「起きてるか」

隣の邪魔にならぬよう、静かに部屋に入り、そつと仕切つているカーテンを開けて、わたしは声をかけた。

「寝られなくて、睡眠導入剤を買つて、うつらうつらしたけど……」

「そやろうなあ」

「早速やけど、どうしても頼みたいところが二つあるんや」

「なんや、言つてみいな。ところで、向こうに聞こえへんか」

「小さい声でいうから、大丈夫や」

「分かつた」

一つは、預金通帳と印鑑とキャッシュ

カードと暗証番号を渡すので、手術の間持つていて欲しいということだつた。

「現金は？」

「小銭だけやから、ええわ」

「分かつた」

「こまで来たたら、もう、医者者に任すしかないけど、失敗ちゆうこともあるわな。その時は、これで後の始末をしてほしい。そやけど、無事に出てきたら、返してな。知らん、言わんといてや」

あいつは精一杯の冗談を言うのだった。出来るだけ明るく振舞おうとするあいつの気持ち、痛々しく感じられた。だが、暗い表情を決して顔に出すまいと、わたしは思った。

もう一つは、どこにも在るような封筒だつた。弁護士電話番号が入

ついでるので、何かあつた時は、遺言を  
実行して欲しいと連絡を入れてくれ  
というものだった。

「会社を辞めて、周りに人が居なくな  
つた。それで、いざという時のために、身  
辺整理をしておかないかと思つたん  
や。偶々、勤めていた時に、何かと世話  
になつた弁護士がいて、丁度一年ほど  
前、そのひとに作るのを頼んだんや」  
今度は真面目な顔をして、わたし  
に言うのだった。この周到さはあいつの  
ものだ。

「四・五時間、預かつておくわ」

「預かつてもらうだけで済んだら、え  
えけどなあ」

「またそんなこと、言うて」

「そやな。もう、逃げられへんなあ。』組  
板の上の鯉』やもんな」

「そや、鯉や」

「錦鯉やないなあ。もう、色褪せてしも  
うてるもんなあ」

「そんなことないで、錦鯉やで。ちよつ  
と、頭は、褪せてるけどな」

「おまえも、言うなあ」

こんな他愛もない、遣り取りをして  
いると、看護師が部屋に入つてきた。

「ご家族の方ですか。そろそろ、準備も  
ありますので、手術室の前で待つてい  
てください。術後に、執刀の先生から、  
話がありますので。手術室は三階で  
す。前に、待合室がありますから」

「分かりました」と言いながら、あいつ  
の方に向き直つた。

「そしたら、三階に行つて、待つてるわ」

「悪いな」

「もうそれ、言いなさんな」

静かに、そう言つてカーテンの外に  
出た。

「ええつと、エレベーターの方向はどつ  
ちやつたかな」と独り言を言いなが  
ら、病室を後にして歩き出した。

「手術を待つのは何回目やろう。お  
やじがそうやつたなあ。あの時も、五  
時間近くやつた。二回目か。うまいこ  
と終ればなあ」

期待と失望が入り交じつた、じり  
じりするような長い時間を思いなが  
ら、わたしはエレベーターを待つ人の  
中に居た。

手術室前には、何組かの家族らし  
い人達が、ソファアに坐つて待つていた。  
人の多い割には、静かな雰囲気だ。だ  
が、空気は重い。暫く、待つてみると、手  
術を受ける人が、看護師に付き添わ



れて、次々と現れた。車椅子に乗っている人もあれば、ストレッツチャーに乗せられて、来る人もあった。

何組かの家族が、一人の男性に群がった。心配そうな顔ばかりが、何か小声で言っているようだった。無理矢理笑顔を作ろうとしているのが、他人のわたしにも分かる。強張った笑顔を残して、手術室に、その男性は消えていった。すると、その家族たちは、緊張が解けたのか、ソファーに坐ると、やや大きな声で話し出した。手術室の前がざわついてきた。

あいつが車椅子に乗って、看護師に付き添われ現れた。近づいて、どう声を掛けていいのか分からなかった。「頑張れ」はない気がした。車椅子の横を歩きながら、黙って手を握った。握り

返す手が震えているように、わたしには感じられた。

「待つてるから」  
「うん」

短い言葉だけを残して、あいつは手術室の中に消えていった。

振り返って、元のソファーに戻り、何とはなしに手術室の入口を眺めていた。年若い女性が看護師の押す車椅子に坐り、ゆつくりと手術室に入ろうとするのが見えた。その後ろについて、三十代後半とおぼしい、ちよつと小柄な女性が心配そうに静かに歩いていた。その車椅子が手術室に消えた。それでも、手術室の戸が開いている間、爪先立って見送っているその女性が、妙に印象に残った。

腕時計を見ると、九時半を少し回

つていた。

「そろそろ、始まるなあ」と呟いていると、手術室前の待合室が、ますます騒がしくなってきた。どうも、あの男性の家族がどんどん増えているようなのだ。なかには、小さな子供を連れただもいる。

普通の時なら、それほど思わない声も、緊張していると、鋭く響いて気になるものだ。わたしは九階で待つことにした。まだ、五時間近くはかかる。終るのは午後二時半頃だろう。九階に戻って、看護師詰所にここで待つていることを告げ、エレベーター前のフロアーに向った。ソファーの置いてある横に大きな窓があった。何気なく、そこから外を見ると、真正面に生駒の山並みが見えた。病院の周辺は大きなビ

ルが多いのに、その方向にはビルがなく、遮るものが何一つなかった。

「頂上付近に、テレビ塔が見える。くつきりと晴れているので、手が届くような近さを感じられる。山頂から、緑や褐色のまだらな模様か山の中腹辺りまで続き、そこから麓にかけて、住宅がなだらかなスロープに沿いながら、広がっているのが見える。その裾野を始点とするように、一本の道路らしいものが、低い建物の塊をさいて、高い建物の多いこちらの方に伸びてきている。」

「生駒も、家が建つたなあ」と呟いて、ソファーにわたしは腰を下ろした。

「俺、会社辞めた。もう、社長には付いて行けん」

「しがない課長で、もうすぐ定年の俺

と違、こうて、役員なんやろ。役員同士が団結して、社長に言うたらええのと違うんか」

「あかん。俺、役員の間で浮いてしもたんや。言いたいこと言うてたから。言わんと、後悔しとくなかつたから。辞める言うたら、はい、どうぞという感じやつた」

大阪で、わたしの定年祝いをしてやるという、飲み会でのことが頭に浮かんできた。

「何や、そしたらお互いの祝いやないか」

「そうなるなあ。若干ニュアンスの違いはあるけどな」

「そしたら、今日の勘定はどうなるんや。奢りやないんかいな」

「そやで。割り勘やで」

「何、それ！」

そんな他愛もないことを言いながら、あいつの決断の早さには驚いたものだ。多分、それは仕事柄身に着けたものだろう。わたしは若い奴に指示されるのが、もう嫌だった。「えらい違いやつたなあ」と互いの六十の頃を、ぼんやりと思いついていた。

突然、声が聞こえた。

「いいですか。ここに坐つて」

ページユ色のスポーツウエアーを無造作に着た若い女性が、わたしの前に立っていた。見た記憶があつた。この歳になると、反応が頗る鈍くなる。誰だろうと頭の中で思いを巡らした。すると、心配そうに見送っていた姿が浮かんで来た。

「母の前に、手術室に入られた方の…

「とその女性が、落着いた声で続けて言うのだった。

「はい、その付添いです。あなたは、私達の後に、入られた方の……」

「そうです。待合室が賑やかになつてきたので、上がつてきました」

「そうですか。同じですね。どうぞ、どうぞ、坐つてください」

「有難うございます」

肩までの髪を後ろで一つに括り、化粧気のない小さな顔、二重のくつきりとした目、すつと通つた鼻筋、薄い唇、

知的で意志の強そうな女性だと、向き合つてわたしは思った。

「あの方はご兄弟ですか？」

「いいえ。友人です。家族がないもので」

「へえ。お一人ですか」

「そうです。子供がなく、奥さんとも死別したので。血の薄い、薄い親戚はあるようやけど」

『遠くの親戚より』つて言いますよね

「学生時分からで、かれこれ四十年以上の付き合いです」

「へえ、そんなに。男の人の付き合いは長い場合が多いですね。女性の場合は、結婚や育児で、徐々に疎遠になつていくけど。わたしは結婚も育児も経験

ないのですが」

この女とは、何となく直感的に、話が出来そうに思えた。心配事がある

と、それを忘れる為に、人は話す相手を求めるものだ。ふと、エレベーターの方を見ると、壁に時計が架かつているのに気付いた。もう、十時をすいぶん過ぎていた。

「仕事はしてらつしやらないのですか」  
「ええ、していません。わたしは、気楽な年金生活者です。わたしのカレンダーは赤字ばかりです」

「面白いことを、おつしやいますね。わたしも、同じ赤字ばかりですよ」

「年金生活者には、見えませんが」

「それつて、冗談ですか。年金まではまだですが……。休職中の身です。それも、アルコール依存症の治療中です」

「はあ？」

次の言葉が、咄嗟に出てこない。それにしても、初対面の者にこれほどざらつと、プライベートなことを言えるものだとわたしは感心した。世代が違ふのだろうか。

「また、どうして、そうなつたのですか」

「わたしは、中学校で英語を教えてくださいます」

「先生ですか。それも、英語の。嫌いでしたね。発音がどうしても、下がるんですよ。そうすると、クラスのやつが笑うんです。それがトラウマになってしまつて」

相手の隠し立てをしない話し振りが、わたしにもうつつたのかも知れない。わたしも自分のことを隠さず喋りだしていた。

「学校つてところは、夏休みに冬休み、休みが多くていいんじゃないですか。外から見ると、気楽そうに見えますけどね、怒られそうやけど」

「そう、おつしやる方多いですよ。だけど、生徒指導に父兄指導。あつこれは言い過ぎ。いえ、父兄指導は必要でし

たね。それに、職員会議に進路相談、採点や生徒記録や何やかや、山のようにはありましたね。それにあのイジメが加わると……」

ちよつと曇つた顔になつて、エレベーターの辺りに目をやりながら、その女性の声小さくなつた。スポーツ・ウエアーのジツパーに手をやつたり、放したりしながら、また喋り出した。

「そんなことを長く続けていると、寝られなくなつてしまいます。それでお酒を飲む。だんだん、量が増えてくる。気付いた時には、お酒を放せなくなりましたね」

「学校でも?」

「ええ。一人で残っている時は飲んでいましたね。それで、一年前に依存症を絶とう思い休職しました。来年の新

学期から復帰する予定です。今、不安な気持ちなんです。それに、母の病気が加わつて、余計ですね」

人はそれぞれに悩みを持っているものだ。大きいか、小さいかの違いだけだ。この女には、荷が重たかつたのだろう。真剣に考えれば考えるほど、袋小路に入つてしまふ。適当なところで、思考停止しなければ、身体がもたない。「元気に復帰できますよ」と名前も知らないわたしが、慰めの言葉と言つたところで、何の意味があるだろうか。わたしは話題を変えることにした。

「お母様はお幾つですか」

「六十五です」

「まだまだ、お若いですね。それなら、体力もおありだ」

「先生からは、身体は強いし、運がいいつて、言われました」

「運がいいつて？」

「胃なんです、年に一度バリウムを飲んでいて、発見されたのです。バリウムだと写りにくい位置があるんですつてね。母のは発見され易い位置だったそうで、全くの初期。手術も二時間程度で済むそうです」

「それなら、午前中に終りますね」

「そうですね。あと一時間程度でしょうか」

人には運不運はつきものだ。あいつも毎年検査していた。見つかった時には、初期状態が終ろうとしていたのだ。

「お友達は、どうなんですか」とその女ヒトが聞いてきた。わたしは手短に、あいつ

の病状を話した。

「心配ですね。まだ、三時間ほど掛かりそうですね」

「だけど、話をしていると気が紛れますよ」

「そうですね、わたしも一緒です。病人が一番辛いのは分かっていますが、待つ身も辛いですよ。一人でいると、悪い想像ばかりしてしまいますもの」

こんな話をしている途中でも、目の前を看護師が行き交う。点滴を吊り具に架けてゆつくりと、入院患者が通り過ぎる。見舞いと思しいひとが、花束を持って通り過ぎて行く。あいつのことが頭に浮かぶ。麻酔で眠つてはいても、必死に闘っている姿が。

「ご親戚が来られるのでは？」

「いえ。誰も来ません」

「一人っ子ですか」

「いえ。弟がいます。母は弟家族と住んでいました。だけど、姑と嫁はうまく行かないものなんです。結局、母が家を出て、私と一緒に住むようになりました。もう二年になります。弟は時々電話をくれますが、母は弟の奥さんとは殆んど口を利いてはいません。いいひとなんです、母とは合わないんでしょうね」

「よく聞く話ですね。姑と嫁の話は」

「そうですね。それに、わたしも、母はそう上手くいっているとは思えません」

「親子でも？」

「そうですね。女同士が拗ユジれど始末が悪い。お互い意地の張り合いで、折れることが無いからでしょう。それに、母

は余りに我が儘過ぎますし、わたしは、わたしで……」

悲しそうに、曇つた表情でその女は言うのだった。どこの家庭でも揉めごととはある。意地を張り合うのか、それとも妥協するのか、難しいことだ。

「弟の奥さんがここに見舞いに来たら、血の雨が降ります、きつと」

「それは無いでしょうが……。ところで、弟さんは？」

「奥さんに気兼ねして、よう来ないのです。それが、余計に母を腹立たしくさせているのです。まあ、終れば、連絡を入れることになつてはいます」

その女はそう言いながら、エレベーターの方向を見ていた。時計は十一時を既に回つていた。わたしと他愛も無い話をしていても、母親の状態が気

になるのだろう。

どんなに關係が拗れていても、心の底で、肉親が気にならぬ者は居ないだろう。だが、人とは哀しいものだ。罵声を浴びせ、時には、肉体を傷つけることもある。人の心には相容れぬものが住んでいるのかも知れない。美しいものと醜いものが、互いに裏腹に住んでいるのだろう。

「そちらはまだまだですね」

「そうですね」

「ところで、お友達は どうして、再婚なさらなかつたのでしょうか」

「それが、わたしにもはつきりと、分らないんだけどー。再婚の条件は良いと思つて、勧めたんだけどね。しようとしなかつたですね」

「亡くなつた奥様のことが忘れられな

かつたとか……」

「そうやろうか。『葬式が済んで、やつと落着いた頃、テーブルの上に、無造作に置き忘れたあいつのマグカップがあった。それが絵柄のない白磁で、飲み口にほんのり紅い色がついていた。口紅やと思つた瞬間、それに唇を当てていた。ひんやりとした感触がした。その時、しみじみと一人になつてしまつたんやと思つた。その途端、涙が溢れて、溢れて止まらなかつた』つて言うてたなあ」

「そうですね。もう、そんな思ひはしたくないつてことでしょうか」

「多分ね。わたしはそう思つてるけどね。一人にもなりたくくないし、一人にもさせたくないつてことかなあ」

その女が黙つてわたしの方を見てい

る。わたしは何か言おうとしたが、それ以上言葉が見つからない。暫く、静かな時間が流れた。

看護師がわたし達の方に歩いてきた。

「内田さんですね」

「はい」とその女が短く答えた。

「手術が終わりました。もう直ぐ、先生から説明がありますので、手術室前の待合に行ってください」と看護師が用件を伝えた。看護師が足早に去っていくと、その女がわたしの方を向いた。

「内田です、名前も言わないで。余計なことばかり、話したりして」

申訳なさそうに、それでいて、多少きまり悪そうにその女は言うのだった。

「山本です」と短く答えて、「いえ、いえ、そんなことはありません。わたしの方こそ余計なことばかりで……」と言葉を足した。

「それでは、失礼します」

「良い結果を願っていますよ」

「ありがとうございます。そちらは、まだですかね」

「まだ、二時間は掛かるでしょうね」「良ければ、いいですね。奥さんが『まだ、こちらに來ないで』って、きつとおっしゃてると思うので、大丈夫ですよ」

その女はそう言い残して、エレベーターの方へ、足早に歩き出した。エレベーターが停まると乗り込んで、こちらを見ながら、頭を小さく下げた。わたしも、同じようにすると、それを待つていたかのように、エレベーターが閉まり

下に降りて行つた。横の壁を見ると、十二時を既に過ぎていた。

わたしは腰を上げて、傍らの窓の前に立った。生駒の連なりが暗く見える。太陽が雲に隠れたのだ。高いビルも、ひしめく家々も何となく陰鬱に染まつているようにわたしには感じられた。どことなく嫌な気分になつていくと、生駒の連なりが明るくなりだした。暖かくて、柔らかな光が、その連なりを照らし出してきたのだ。

「後半分や。鈴木、辛抱や」と小さくわたしが呟くと、不意に、今朝の掛け、何気なく、女房の言つたことが頭を掠めた。

「今年のドウダン、凄く綺麗よ。紅に朱色が混ざつて、その朱色が強いよ。それがとてもいいの。それに、長持ちし

に  
「  
て  
い  
る  
わ  
。  
い  
つ  
も  
な  
ら  
ま  
う  
散  
つ  
て  
い  
る  
の

了





詩三編

大西隆史

雑踏の中で

雑踏の中 ヒトの溢れる中 僕は溺れる  
ヒトのざわめきが 耳から侵入し  
蝸牛をぐるぐると回り 半器官を軋ませる  
そうして巡りきた彼奴らが 神経を犯す

君は可哀想だねと  
君は大変だねと  
君は辛いよねと  
僕の耳を ヒトの声が侵した  
可哀想ね やめろ  
大変ね やめろ  
辛いね やめろ  
薄ら笑いを浮かべた彼奴らが 精神を犯す

不適合者なのだと叫びたい

可哀想じゃないと

大変じゃないと

辛いしないと

大声で 胚の空気の全てを使い 叫びたい

お前らの枠に嵌めて いびつに歪んで 切り捨てられ  
た 僕を

微笑みながら切り捨てたお前らに 叫びたい

回りが皆

君は可哀想だねと

君は大変だねと

君は辛いよねと

嬉しくもなさそうな顔で 楽でもなさそうな顔で 幸  
せでもなさそうな顔で

囁いた

ワタシたちは嬉しいから

ワタシたちは楽だから

ワタシたちは幸せだから  
といいながら 憐憫の眼差しを 濁った目で向けた

息苦しい

幸せなんて言葉を 杵を 縄を

知らなければ良かったのか

僕は分らないまま

雑踏を後にした



不純物

正しさが襟を立てて歩く

正しい行いをしろ

正しい姿勢で物事にあたれ

正しい生き方をしなさい

皆、正しさを臆面もなく口にする

自分の正しさがまるで 決して崩れぬ堅城であるかの如く

なにかその正しさを担保するのか

皆、口をつぐむ

清らかさが威張りながら歩く

清らかな行いをしろ

清らかな心を持って

清らかな人柄であれ

皆、清らかさを恥ずかしげもなく口にする

自分の清らかさが、決して終わらぬ夢幻の如く

清らかであれば幸せなのか

皆、口をつぐむ

白は正なり 黒は悪なり  
皆が白たれと喚き立てる  
あなたは白なのですかと問う  
微笑みは何も語らない

太陽と月

昼と夜

陰と陽

光と闇

対なる存在が互いを産み 互いを支えるというのに  
皆、片方だけを追いかける  
なぜにや

不純物の無い正しさはもうい  
不純物の無い美しさはもうい  
皆が切り捨てて不純こそが  
皆が憎む不純こそか

世界を作っているのだと

私は想う

そう想う私の心も 不純物なのかもしれないと



歯車

歯車に私はなりたい

縦横無尽に張り巡らされた、その一つに

横から縦から斜めから

あらゆるところから力を受けて回り続ける

そういう歯車に私はなりたい

願わくは

抜け落ちたときにほんの少し

動きが鈍ってしまう歯車がいる

そういう歯車に私はなりたい

たとえ、そう

無尽蔵の歯車の片隅でも

誰かとかみ合つて回っている

そういう歯車に私はなりたい

もつと願えるならば

どこかが抜け落ちたときにほんの少し

動きが鈍くなってしまう

そういう歯車に私はなりたい

歯車は独りぼつちじゃ廻れないから

誰かと誰かがかみ合つて

ときどき調子を狂わせながら

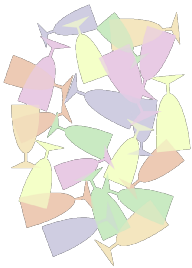
廻っているのだ

歯車になりたい

誰かに「あなたが必要だ」と言つてあげられる

誰かに「あなたが必要だ」と言つてもらえる

そういう歯車に私はなりたい



「Kの死」

胃弱亭 骨人

「K」の計報は突然もたらされた。カメラ片手の紅葉行脚をようやく終えた私が、そろそろ恒例の忘年会の連絡を彼にしようとしていた矢先であった。電話の向こうに彼の姉の声を遠く聞きながら、「あの頑強な彼がどうして……。」と、絶句した。

人にはだれでも自分の人生、生き方に影響を与えた人物が一人や二人はいるものだが、私にとつては正に「K」こそがその人物であった。高校一年の時の彼との出会いが、その後の私の人生を決定づけ、今の自分が型づくられたと言つて過言ではない。

生まれた時から母子家庭の独りっ子で、のんびり育つた私が「K」から受けた影響は人一倍強かつ

たと思う。クラスメートの彼とは物事を斜めにとらえるところで妙に気が合い、お互いにある種のことには偏り、拘わること喜びとしていた。人間関係で言うならば、独りっ子の私は、彼のもつ親分肌的強引さに魅力を感じ惹かれていたようである。いつも私の一歩前を歩む彼に、私は安堵していたのである。

彼も早くに父を亡くし、私と同様母子家庭であつたが、父を継いだ長兄が経営する会社の三男坊、「お坊ちゃん」であり、私とは経済的に随分隔たりがあつた。初めて訪問した彼の家は、借家住居の私からすれば、正に王宮と呼ぶにふさわしいものであつた。暖炉のある部屋に置かれた大きなステレオ。ロッキングチェアに埋もれて聴くジャズの調べ。ケネディ大統領暗殺を中継したカラーテレビ。初めて口にしたコココーラの味。等々、彼の生活は神

秘の宝庫であつた。全てにおいておくてであつた私は、彼を通して当時の文化の最先端に触れてきたように思う。学生時代すでに、オメガの腕時計をはじめ、ペリカンの万年筆を胸に挿し、ニコンのカメラを携えた彼の姿は、私のあこがれでもあつた。今思えば、私が給料を手にするようになってから「モノ」に拘り出したのもその時の彼の影響によるところが大きいと言える。

生活水準こそ大きく異なつてはいたものの、妙に気が合い、共に行動することでお互いの心は満たされていたのであろう。ちよつびり人生についても考え始めた私達は、よく須磨の海岸まで自転車走らせて、夕陽に頬を染めながら、好きな女性への思いなどを熱く語り合つたものである。高校三年生になつた時、それまで漠然と就職することしか考へていなかった私が、すでに大学進学を目指していた彼に引きずられるように、一転進学を決め、担任をあわてさせたものであつた。この時の進路決定が私

の人生を大きく決定づけたことは否めない。ともあれ、私の高校生活の中で唯一まじめに勉強に取り組んだ時期でもあつた。

学生時代、二人で初めて挑んだ北アルプス登山。互いの健脚を競うように目指した槍ヶ岳。その頂に立つた時の感動は、色あせたモノクロ写真と共に、青春時代の宝物として大切にしまつてある。社会人となつてからも、会社経営と中学教師、生き方は大きく違つていたが、仕事を越えての親交は続き、毎年仲間四人の忘年会（同窓会）は、卒業以来一度も欠かしたことがなく、学生時代の思い出話は尽きる事がなかつた。

頑強な体と強固な意志を持つ彼は、決断と行動が早く、何事にもせつちかであつた。人と相談せずに自分の意志で強引にひつぱるところがあり、皆、彼に従わざるを得ない場面も多々あつた。常に仲間の一歩前を歩み続けた彼の精力的でせつちかな生き様は最後まで貫かれた。

誰にも弱みを見せずに独り、急性白血病と闘った「K」。本人や家族を前にしての医師の告知に対しても彼はひるまず、「今の言葉は、わしに対する死刑宣告ととつてええんやな。」とだけ答えたそうである。そして二ヶ月余り、見る見る衰弱していった彼は、仲間と会うこともなく、独りせつかちに旅だった。

今も彼は私の前を足早に歩いている。いつものようにポケットに手をつ突っ込んで、大きな肩を揺すりながら、後ろを振り向こうともせずには………

完



門本君

小野村 新一

日曜日の夕刻、門本君から電話があつた。今週の土曜日、ビアガーデンで一杯やりませんか、という誘いであつた。ビアガーデンとはここ数年縁がない。「ビアガーデンか、いいねえ」。二つ返事で承諾していた。

門本君というのは、私が新任教師として勤めたH高校の教え子で、現在はK市の消防署に勤務している。フアイヤーマンというわけだ。大阪の某私大の英文科を出ているのだが、英文科と消防署がどうもしつくり合わないのでその理由を尋ねると、大学生の時、高層ビルの大火災を描いた映画『タワーリングインフェルノ』を観て、ステイブ・マッククイーン演ずるところ

の消防士に感動し、フアイヤーマンを志したという。そういえば、門本君はこの映画で建築技師を演じていたポール・ニューマンにどことなく似た顔つきをしている。

高校時代の三年間を通して、担任をしたこともなければ授業を受け持ったこともないのだが、門本君は私が顧問をしていた柔道部の部長であつた。門本君が三年生の夏、柔道部は県大会でベスト四に進出したことがある。H高校始まって以来の快挙と騒がれ、顧問の私も鼻が高かつたことを覚えていて、この大会で門本君は先鋒として活躍した。決勝進出をかけた試合で、残念ながら関節技で一本を取られた。試合が終わつた後で、「あんまり辛抱すると、腕を折られてしま

うぞ」と忠告すると、「決勝がかかつた試合の先鋒がそう簡単に降参できますか。後に続く四人の士気にかかわりますよ」と言つたものである。今でも、門本君が体をよじりながら、参つた！と相手の腰を激しくたたきまくる場面が脳裏に浮かぶ。現在でも冬になると、冷えた左肘が痛むことがあるそう。私があつた時のことを話すと、「右腕でなくてよかつたですよ。関節技や絞め技など廃止にすればいいのに。全く野蛮ですよ、あんな技は」と言いながら、ひとしきり柔道論をぶつのであつた。

門本君が私の家に遊びに来るようになったのは今から十年前のこと、それにはあるきっかけがあつた。師走の冷たい風が吹きさすさぶ日曜日、著名



なスポーツ評論家の講演を聴き終わつた妻と私は、市民会館の駐車場まで歩いてた。その時、交通事故によつて車の中に閉じこめられた女性を救出している現場を目撃したのである。

市民会館から流れるように出てくる人々が野次馬となり、人垣をつつていた。消防士たちはその視線に取り囲まれるようにして、ひしゃげた車体とハンドルの軸に挟まれ、苦しみもがいている若い女性の救出作業に没頭していた。痛みに耐えられないのか、女性はどうなり声を発し続ける。そんな女性を励ましながら、車体とハンドルのわずかな隙間にフニの口状のものを差し込み、油圧ポンプを使つてその隙間を広げている消防士たちに罵声が浴びせかけられる。「何をもたもたし

ているんだ！」「早く助け出さないと死んでしまふぞ！」

緊迫した二十分ほどの時間が経過した頃、無事に女性は救出された。野次馬の間から期せずして大きな拍手がわき起こつた。担架で運ばれる女性の周りを心配そうに取り囲む身内の人たち。女性に外傷はないようだ。ほつとした表情で救急車に乗り込もうとする消防士たちの中に、見覚えのある顔があつた。門本君である。「門本君！」と声をかけた私の方を見て、「先生！」と驚きの声を発し、「ごぶさたしています」と、大きく頭を下げた。実に七年ぶりの邂逅であつた。

このことがあつてから、門本君は時々私の家を訪れるようになった。来る毎に、旅行のみやげや自ら釣つた魚を

持つて来てくれる。酒を飲んだ日には泊まることもあつた。

あの時の救出作業のことは今でも話題に上ることがあるが、あれは比較的スムーズに事が運んだ例らしい。救急出動のほとんどが悲惨で目を覆いたくなるような事例ばかりのようだ。あの時の女性が挟まれていた部位が下半身だったので命に別状なかつたが、上半身の場合は内蔵を強く圧迫され、死に至ることもあるらしい。

門本君は一昨年から事務一本の仕事に換わり、消火活動に携わつたり、救急車を走らせたたりすることはなくなつたらしい。もつとも、消防署の事務もけつこう忙しく、煩瑣な手続きを要する書類書きに悩まされることも多いようだ。消防署などというもの

は、火事と救急がなければ暇な職だろうというのが一般的な見方だろうが、なかなかそうでもないらしい。教師は授業だけをしていればそれでよい、と見られているのとよく似ていて、職場の内実などというものは、傍目では分かるわけがないのだ。

約束のビアガーデンは、Sデパートの屋上にあつた。開店したばかりで客はまばらである。炎暑の名残を思わせる夕陽が金色の光線を、乾いたコンクリートに放つている。日陰になつて席を選び、落ち着く。

「ビアガーデンなんて、何年ぶりかだよ」

「そうですか。ぼくなんか、年に数回は来ますよ。何しろ、ここは三千円で飲

み放題、食べ放題ですからね。先生もけっこう飲む機会が多いとおつしやつていたじゃないですか」

「どういうわけか、近年はビアガーデンとは縁がなくなつてね」

すべてセルフサービスの店である。ビールはカウンターまで取りに行かなければならない。つまみはバイキング形式である。門本君が盛り上がるほどおつまみの入つた皿を両手に持ち、戻つて来た。枝豆、ウインナソーセイ、焼き鳥、唐揚げ、ギョウザ、シウマイ、野菜サラダ。各種の総菜、おでんまである。

「すごいねえ。パラエティに富んでいるじゃないか。……これはうまそうだ」

私が目を輝かせると、門本君はうなずきながら椅子に腰掛けた。

「それじゃ、乾杯といきますか」  
二人でジョッキを合わせる。

ごくごく大ジョッキの半分ほどまで空けて、門本君は舌をタンと鳴らし、これ以上の幸福はないといった満足そうな笑顔を見せた。笑うと目尻が下がり、童顔になる。門本君がポール・ニューマンに似ているのは、どうやら笑つた時の目尻の皺に因るらしい。

「やはり夏はビールですねえ」

門本君はめつぼう酒が強く、何でもいける口である。酒に関してにはひとつの持論がある。(酒は季節によつて飲み分けるべきである)というのがそれだ。春はウィスキーカビール、夏はビールか焼酎、秋はワイン、冬は燗をした日本酒というわけだ。もちろん、はつきりと區別して飲み分けているわ

けではない。あくまでその酒がそれだけの季節の主になるというこらしい。

私も門本君の影響でワインを飲み始めたが、彼の持論が解るような気がした。ワインという酒は、あのしんとした寂しい冷気のある秋に飲むのがいちばんふさわしく思われたからである。「ワインは秋にしか飲まない。いや、飲めない」と門本君は言ったものだ。

彼は理論家である。理論家はちと褒めすぎだ。理屈屋のほうがふさわしい。ワインに合う音楽はカーペンターズで、日曜日の昼下がりにカーペンターズを聴きながら白ワインを飲んでまどろむのは無情の楽しみだ、などとロマンチックなことを言う。彼の理屈が及ぶのは酒に關してだけではない。音楽、スポーツ、釣りなどにも彼なり

の独特の考えを持つており、披露してくれる。

鮎の友釣り談義には妙に説得力があつた。鮎釣りの時期である六月頃から九月の初旬までの三ヶ月は鮎のことしか頭にないという。二年前には二十八センチもある大物を釣り上げたそうで、その時の、引きが来てから「ぼくのモノ」にするまでの数分間の胸躍る体験を、目を輝かせて話すのであつた。釣りには全く興味のない私に、一度鮎の友釣りというやつに挑戦してやろうかと思わせたほど、その話は真に迫つたものであつた。

七時を過ぎた。うす暗いピアガーデンの周囲に灯がともつた。三百席はあろうかと思われるガーデンのテーブルはほぼ満席に近い盛況である。会

社帰りのサラリーマンや〇上のグループ、若いカップル、中には一風呂浴びた後、家族で繰り出したような格好の人たちも見受けられる。

それにしても門本君のピッチは早い。百七十八センチ、八十五キロの堂々たる身体の中に、ジョッキのビールを流し込む。三本目を飲み干した門本君は、四本目をお代わりに立つた。足取りも確かである。しかし、この頃から彼の口は流ちように動き始めた。理屈屋門本の本領発揮である。彼が縁遠い原因もどうやらこのあたりにありそうだ。門本君は、三十五歳でいまだ独身なのである。酔いに任せて私は訊いてみた。「君はいつだいのくらい見合いをしたのかね？」

私の声が大きかったのか、隣のテーブルの若い女性が私たちの方に窺うような視線を投げかけてきた。門本君も私の唐突な質問に驚いた様子を示したが、すぐに返答した。

「十二回です」

「よく覚えているんだね。細かい数字まで正確に」

私を感じしたように言うと、持ち上げたジヨッキを一度テーブルに戻して、

「そりゃあそうですよ。……結婚は一生の重大事ですから」

「重大事でもないよ。私なんか見合いしてから半年で結婚したんだよ。十二回も見合いをして結婚まで行き着けないというのは、よほどでもないかうぬぼれ心が強いかのどちらかだよ」と

冗談交じりに言うと、「それはひどいですよ」と大声で笑い、次のようにまくしたてる。

「人生において結婚ほど大切なものはありません。たとえば、大学を選ぶことなんか知れていますよ。東大や早慶に入るために何年も浪人する者がいるが、くだらないことだと思えます。就職にしたつて、さほど重大な選択だとは思えません。仕事というものは、単なる生活の手段に過ぎませんから。ある程度自分に合った仕事を選び、生活の糧を得ることができればいいんです。それに対して、これまで他人だつた人間と一生生活を共にする結婚というものは、人生における最大のわかれ道となる重要事です。慎重になつて当然ですよ」

「しかし、四十を過ぎると結婚相手も限定されてくるよ。何より体力と精力が減退してくる」

門本君は少々神妙な顔つきになつて、

「後五年というわけですか。……でも、それまでには何とかしますよ」

普段は比較的無口な私も、酔いのせいで口が滑らかに動く。

「結婚というものは、結婚してみなくては分からないものだ。君が見合いをした十二人の中には、結婚してみても初めてそのすばらしさに気づく、真に相性の良い女性がいたかもしれないのだよ。たつた一度の見合いで人生の伴侶を識別するなんて、至難の業だよ。君にそんな能力などあるわけがない」

「たつた一度だけの見合いで断つたわ

けじゃないですよ。中には数ヶ月つきあつた女性もありました。しかし、一生一緒に生活するとなると、……。先生のように、見合い後半年もしないうちに結婚なんてまねは、ぼくにはできませんよ」

「最近では、信頼の置ける交際の情報誌が発行されているし、県知事推薦のお見合いパーティーもあると聞くよ」

「ああいう出会いはいやなんです。信用できそうではない。何か下心を持った連中が応募しているようですよ」

「見合いでなくとも、出会いは至る所に転がっているだろう。私の同僚に、交通事故を起こした相手の女性と結婚したという人がいるよ。人生何がきつかけで恋が芽生えるかわからないも

のだよ。ポーランドのピアノリストのルービンシュタインが日本に来た時、こんなことを言っていたよ。『もし君が美しいプロンドの、だけと頭は全く空っぽの女の子と恋をしたとしても、心配することはないよ。彼女と結婚するんだね、そして、生きるんだ！』どうだ、いいことばだろう。生きるとは、実にこういうことだよ」

門本君は反論する。

「いくら絶世の美女でも、頭が空っぽの女性と結婚する気はしませんよ。そんな女性との間に生まれてくる子供のことを考えてください。それでなくとも偏差値重視の世の中なんですよ。一生を一つ屋根の下で暮らす女性の頭は、せめて人並み以上であつてほしいですよ。時には知的な会話も

楽しみたいものですし。最近目にしたコピーに『頭のいい女性は料理がうまい』というものがありません。おいしい料理も食べたいですね。」

「そんなことを言っていると、君は一生独身で終わつてしまふよ。ひとつ私が君にふさわしい素敵な女性を紹介してあげようじゃないか。十三回目の見合いというわけだ。」

あの話をした時、門本君は相当に酔つていた。大ジヨッキを六杯も飲み干していたのである。私も相当酔つていた。しかし、早苗ちゃんとの見合いのことを話し、快い承諾の返事を得たことはつぎりと覚えてる。酒の強い門本君のことだ。あの快諾は信用してはいはずだ。

早苗ちゃんというのは、私の近くに最近開店した果物店の娘さんのことである。この店は果物が新鮮で、しかも安いと妻はひいきにしている。妻の知るところによると、早苗ちゃんは短大を卒業して三年ほど建設会社事務員として勤めていたが、今は辞めて店を手伝っているそうだ。両親も気さくな人で、すこぶる評判の良い店であるらしい。

妻も早苗ちゃんのことによく褒める。人を褒めるよりはけなすことに長けている妻が、惜しげもなく褒めるのだから、よほどいい娘さんなのであらう。「愛想が良くて利発でかわいくて、才色兼備の見本のような娘さん」とは、妻が早苗ちゃんを評した言葉である。

私も何回かこの果物店に行つたことがあるのだが、買物をしている妻と車の中で待つという形がほとんどなので、真向かいで早苗ちゃんを見たことは一度だけしかないが、妻の言うとおり、とても魅力的な風貌の女性であり、身長は百六十センチくらい、ショートカットでボーイツシユに見えるが、身のこなしがしつとりとしていて女性的である。短大を出てから三年間〇しだつたということだから、年齢は二十三、四と推定できる。

妻に門本君の見合いのことを話すと、すぐに乗つてきた。

「私も気になつていたのよ。消防署には女の人は二人しかいないそうだし、門本さんつてあまり器用なほうでもなさそうだし……でも、あの二人案外

似合っているかもしれないわよ」

「うん、自分もそう思うよ。門本君には少しもつたいない気がするがね。十二回の見合いの内訳は、六勝六敗などと言っているが、分かつたものじゃない。せいぜい三勝くらいと自分は踏んでいる。いくらあの理屈屋の門本君でも、早苗ちゃんには参るだろうよ。もちろん、早苗ちゃんの方から断つてくることも大いに考えられるがね」

「そうなのよ。それが心配なのよ。あんないい娘さんだから、だれもいい人がもういるんじゃないかしら」

「とにかく早苗ちゃんのお宅にお願いに行こう。ことはそれからだ」

「前半終わり」

◆ ショートショート ◆

ゴルフ道具

高阪博一

或る時、友人が家に来て、わたしの予備のパターを見つげ貸してくれと言う。仕方がないので、それを貸した。

暫くして、友人からメールが届いた。

「訳あって、別れた初恋の女にめぐり逢い、もう、はなしたくないという心境です」とのものだった。余程、そのパターが気に入ったのだろう。そこで、わたしもメールを返した。「あなたとの相性が抜群だったのでですね。未永く可愛がつて！」と書いて、そのパターを進呈した。

その後、何度か「良い」・「良い」とのメールがあったが、ちよつと前から、ぶつりメールが来なくなつた。

昨日、友人から、久しぶりにメールが届いた。「初恋はやはり実らなかったよ。一緒になると、徐々に我儘になつて、言うことも聞かないようになったよ」との内容だった。

わたしはそのメールを見ながら、しみじみ「そら、腕のせいなんやけどなあ」と呟っていた。

了







編集室から

あけましておめでとうございませす。  
新しい政治体制は、日本をどのよ  
うに引つ張つてくれるでしょうか。選ん  
だのは私たちです。後もしつかり見つ  
めて行かねばなりません。

よい時代の一步の年となりますよ  
うに。

そしてアクトスとみなさまにとつて  
も素晴らしい年となりますように。頑  
張りましょう。

①次号(第18号)の原稿締め切りは  
3月末必着です。

②前ページにありますように、例会場  
は、サンライフ明石です。

変更・中止等の場合はHP掲示  
板、メール等でご連絡いたします。

一月例会は19日(土)で  
す。

★新年会を4時半頃  
、行います。

三月例会は16(土)です。  
ご予約下さい。

③HPに、17号までを、PDFファイル  
で掲載しました。

URL : <http://actos2008.o.oo7.jp/>  
(ネット検索の窓から「文芸□アクト  
ス」といれて探されても出てきます。)

④会費の払い込みをお願いいたしま  
す。

次号から25年度に入ります。申

し訳ありませんが、同封の用紙で会  
費の払い込みを3月末までにお願いい  
たします。

会員は12000円、読書会員は  
3200円です。

年4回各1冊ずつアクトスをお送  
りいたします。

3月末までに払い込みがない場合  
は退会とさせていただきます。

3月末の登録人数で、18号の印  
刷冊数、送付先を決めます。

会員外への送付を増やしたいと考  
えております。

ご負担をおかけし、大変お手数で  
すがよろしくお願いいいたします。

「亥一郎」



◆入会するには◆

- ① 会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
- ② 〒住所・氏名(フリカ`ナ)・年齢・職業・電話・メール  
を明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可  
〒673-0031 明石市宮の上1の17の614  
大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

※**読書会員の場合 年会費は3200円です。**

4回、各1冊お届けします。(送料含む)

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

◆合評会

奇数月第3土曜日

※午後1時半、

◆場所

中高年齢労働者福祉センター

(サンライフ明石)

〒673-0041

明石市西明石南町

ビル1-21

電話078-923-0770

※JR西明石駅南、徒歩3分


(新幹線西明石駅南徒歩5分)

※明石市立望海中学校・花園

学校の西、徒歩2分

小

- ◆ アクトスに参加下さい。携帯メールかインターネットがあれば、海外からでも参加できます。
- ◆ 例会に参加できなくても、HP・掲示板などで状況を知ること可能です。
- ◆ 少しずつ書きためて人生の足跡を刻んで下さい。
- ◆ ペンネームで発表できます。

 加入方法は前ページをご覧ください。

アクトスHP

URL : <http://actos2008.o.oo7.jp/>

アクトス 第17号

平成二十五年二月一日

編集 大西亥一郎

発行

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上

一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)800円